

八尾市文化財調査報告43
平成11年度公共事業

八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅱ

2000.3

八尾市教育委員会

はじめに

八尾市は、大阪府のほぼ中央部に位置し、生駒山地西麓から大阪平野の東部にかけての範囲に市域を有しております。古くは、河内湖、河内潟に面し、旧大和川をはじめとする多くの河川によって、肥沃な平野が形成されてきました。ここには旧石器時代から連綿と遺跡が形成されており、全国的にも有数な遺跡の宝庫と呼べる地域であります。

本書には、八尾市の公共事業に先立つ遺構確認調査等の成果を収めております。弥生時代後期の土器集積を確認した久宝寺遺跡、鎌倉時代の軒丸瓦等を確認した心合寺山古墳の新池堤体の調査、中世の火葬跡を検出した中田遺跡をはじめとして、多くの新たな知見を得ることが出来ました。

今後、市内の貴重な埋蔵文化財が、市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれるよう、保存・活用されていくことが、重要な課題になるものと考えられます。本書がその役割の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の調査に際し、深いご理解とご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

八尾市教育委員会

教育長 森 卓

例 言

1. 本書は、八尾市教育委員会が平成11年度に公共事業に伴い、八尾市内で実施した遺構確認調査・立会調査の報告書である。
2. 調査は八尾市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査は、八尾市教育委員会社会教育部文化財課技師 米田敏幸、消斎、吉田野乃、吉田珠己、藤井淳弘が担当した。
4. 本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査の概要を収録した。
5. 現地調査・報告書の作成にあたっては、以下の諸氏の参加・協力を得た。
明石信行 板野行伸 岡本光司 浦尻寛子 垣内洋平 加茂靖通 川島直之
島田 拓 周藤光代 高橋尚子 竹村哲哉 藤中貴子 宮野祐介 横山妙子
(敬称略・五十音順)
6. 本書の作成にあたっては、消斎、吉田野乃、吉田珠己、藤井淳弘が執筆を行った。文責はそれぞれ文末に記している。なお編集は吉田野乃が行った。
7. 調査一覧表及び抄録の作成は吉田野乃が行った。

本文目次

1. 久宝寺遺跡 (98-524) の調査	1
2. 史跡心合寺山古墳 (新池、平成10年度) の調査.....	4
3. 史跡心合寺山古墳 (現状変更) の調査.....	13
4. 跡部遺跡 (99-132) の調査	15
5. 中田遺跡 (98-550) の調査	20
6. 中田遺跡 (98-500) の調査	29
7. 東弓削遺跡 (98-246) の調査	31
調査一覧表.....	35

図版目次

- 図版 1 心合寺山古墳 (新池、平成10年度) の調査
- 図版 2 中田遺跡 (98-550) の調査
- 図版 3 心合寺山古墳 (新池、平成10年度) 出土遺物
- 図版 4 心合寺山古墳・跡部遺跡 (99-132) ・中田遺跡 (98-550) 出土遺物

1. 久宝寺遺跡(98-524)の調査

1. 調査地：久宝寺6丁目地内
2. 調査期間：平成11年2月16日・3月5日～18日
3. 調査方法

公共下水道工事に伴い、人孔設置部分の3箇所と管路部分について調査区を設定し、遺構確認調査を行った。今回の調査地は、東西約65mに伸びる範囲になる。

第1区は、調査地の東端に1.2m×1.2m、第2区は、その西側約18mの地点に1.2m×1.2m、第3区は、第2区の西側約17mの地点に1m×1mでそれぞれ設定した。調査面積は計4㎡である。

また、約1m幅の管路部分に関しては、工事掘削時に立会調査を行い、6カ所の部分(調査区設定図で●の部分：「T1」～「T6」と呼称)について、土層と遺物等の確認を行った。

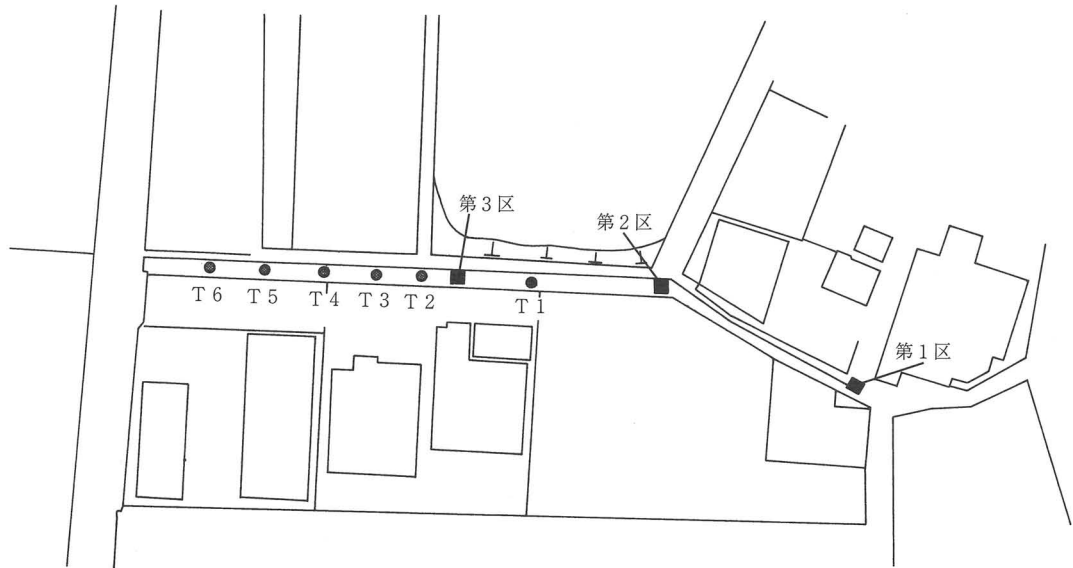
4. 調査概要

今回の調査地は、八尾市埋蔵文化財分布地図(平成8年度版)では「久宝寺寺内町」の西端部に接しており、寺内町の古口と呼ばれる付近にあたる。遺跡としては、「久宝寺遺跡」に属している。調査地のほぼ全域が、現況で排水路として使用されていたか、もしくは近年埋められていた部分になる。そのため、上層では、排水路部分のヘドロ状の堆積や整地層が見られた。そして、第1区、第2区、T1ではその下層に溝状の堆積が確認でき、陶磁器・土器器・須恵器・瓦・瓦器の破片が出土している。この排水路が、近世以降現在に至るまで長年使用されていたことを示している。寺内町の絵図等でもこの排水路が、寺内町の水路網の一部と使用されていた様子がわかる。

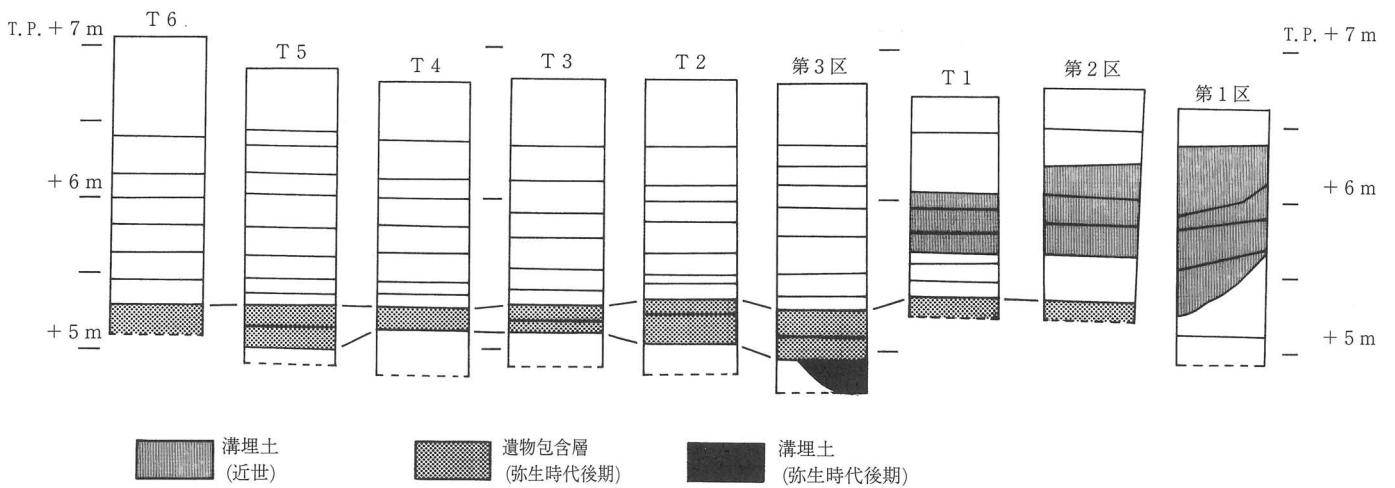
そして、今回の調査の主な成果として、第1区～第3区、T1～T6のほとんどすべてで確認できた弥生時代後期の遺構・遺物包含層の存在が挙げられる。これは、地表下1.5m付近のT.P.+5.3m前後で暗灰色粘質シルト～砂混シルト層が広がり、各調査区とも平均して層厚約0.2mある。T1より以西に該期の包含層が広がっていると思われる。特に第3区のT.P.+5m付近では、深さ約0.2mを測る溝状の落ち込み内(埋土：黒灰色砂混シルト)の土器集積の一部を確認している。



第1図 調査地周辺図(1/5000)



第2図 調査区設定図(1/500)



第3図 土層模式図(1/50)

5. 出土遺物

上層の近世溝の出土遺物は、土師器等の細片がほとんどで図化できるものはなかった。図化できた遺物はすべて第3区の土器集積のもので、その他の調査区の遺物包含層のものは細片がほとんどであった。集積内には、弥生時代後期末の甕(1~10)が中心に出土しており、その他に広口壺口縁(11)、直口壺口縁(12)、高坏破片(13~15)、小型丸底壺(16)、器台脚部(17)がある。

6. まとめ

今回の調査では、久宝寺寺内町に関連する遺構(近世層)と寺内町形成以前の遺構(弥生時代後期末)とを検出することができた。調査地が排水路という性格上2時期の遺構のみの検出であった。以前より寺内町及びその周辺では、下層に弥生時代後期から古墳時代前期の遺構(久宝寺遺跡第2・3・8次調査)が検出されており、今後とも該期の集落の広がりには注意を要する必要がある。(藤井)

【参考文献】

八尾市教育委員会 1988『寺内町の基本計画に関する研究』

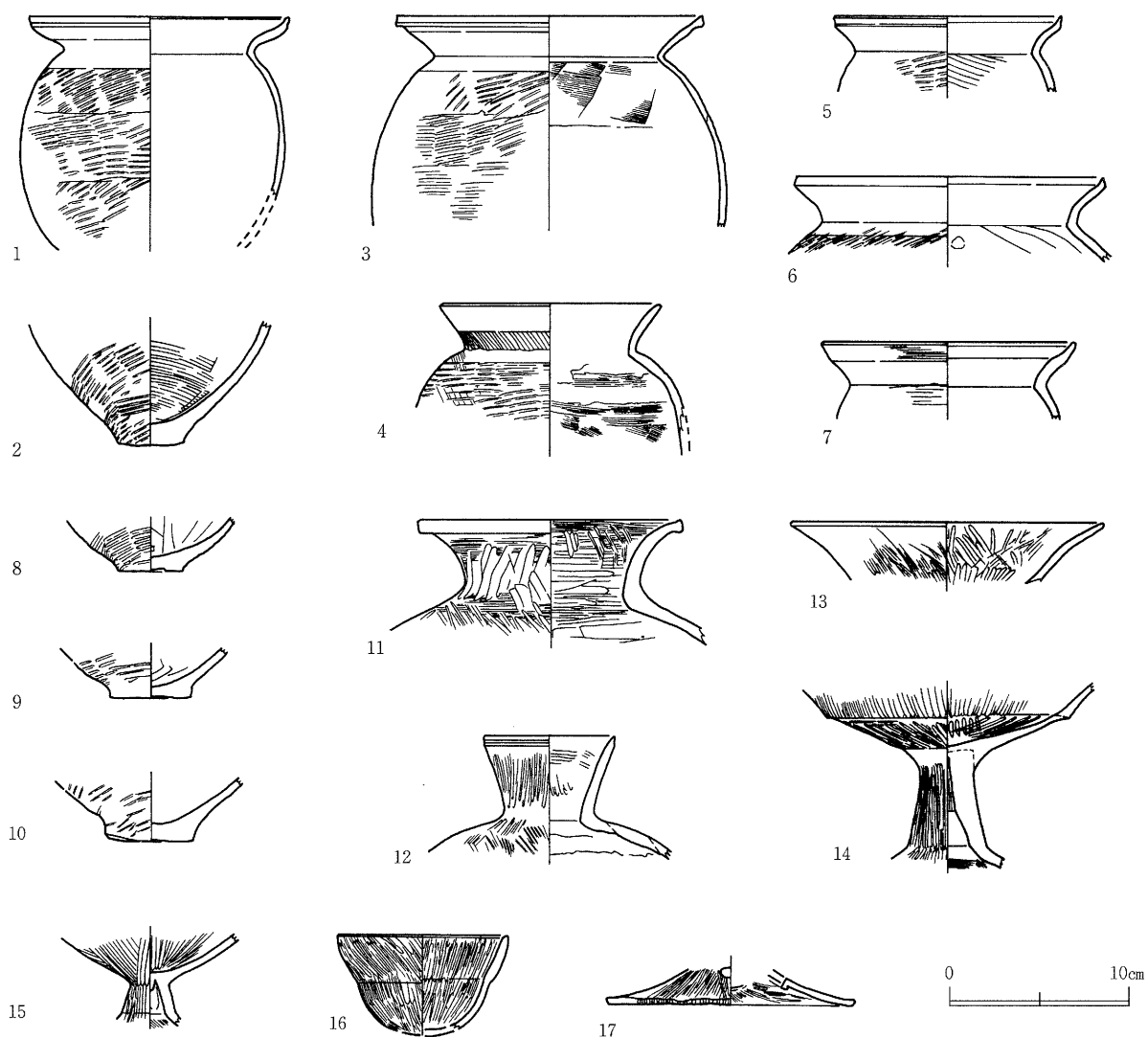
(財)八尾市文化財調査研究会 1988「久宝寺遺跡(第2次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報昭和62年度』

1989「6. 久宝寺遺跡(第3次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和63年度』

1997「I. 久宝寺遺跡(第8次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告55』

1999「久宝寺寺内町遺跡第1次調査」『平成10年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』

八尾市教育委員会 1999「5-1. 久宝寺遺跡(97-694)の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書I』



第4図 出土遺物実測図(1/4)

2. 史跡心合寺山古墳 新池堤体改修工事に伴う調査(平成10年度)

1. 調査地 八尾市大竹5丁目地内
2. 調査期間 平成10年1月22日(西法面)
平成10年2月4日・22日(内法面他)
3. 調査方法

八尾市下水道部河川課により平成9年度から継続して行われている新池堤体改修工事(現状変更許可済)に伴い、立会調査を行った。なお、新設される内法面の擁壁面の基礎及び樋管の開削部分については、(財)八尾市文化財調査研究会により発掘調査が行われた。現況の新池堤体については、平安時代末以降に築堤されものであることが、これまでの調査でわかっている。堤体構成層からは同期の土器片とともに、7世紀後半以降の瓦が多量に含まれており、心合寺跡に伴うものとして注意されてきた。文化財課と河川課の協議のもと、旧堤体層の保護のために腐植土層のみの除去を行う工事がなされた。内法面については平成9年度に引き続き、現況法面の腐食土除去部分の土層確認(2区東端地点、A地点、B地点)及び遺物の採集を行った。遺物採集については本年度施工地点の南半分については、便宜上1~3区に分けて採集した。また取水施設設置の掘削部分についても、断面観察を行った。西法面については南側の現況石積みの17.6m区間について石を除去し、自然石に近い石のブロック積みを行う工事がなされることとなった。石を除去する際に腐植土の削平がなされるため、この部分の土層観察と遺物の採集を行った。

4. 調査概要

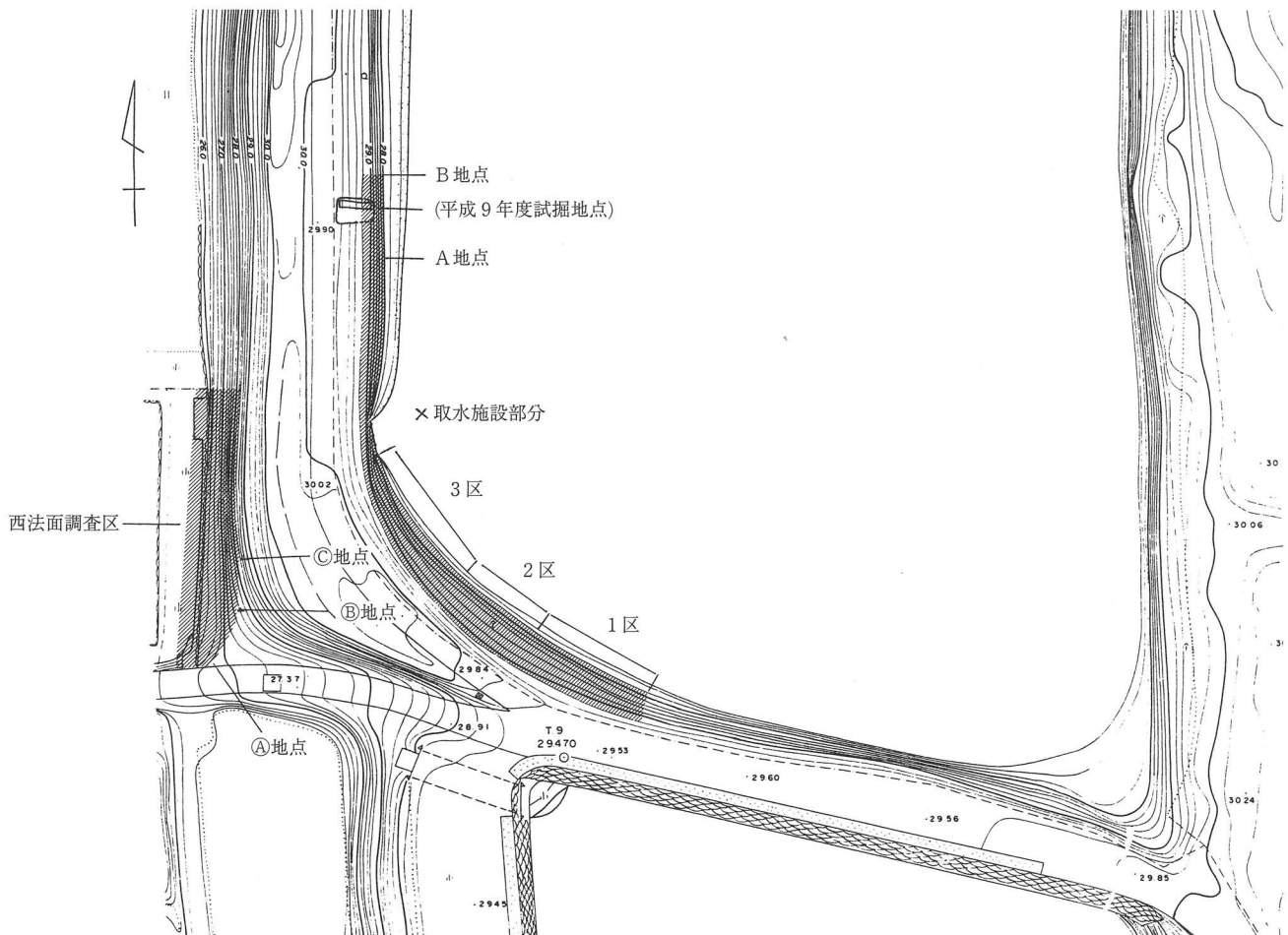
[内法面2区東端地点] 腐植土の削平上端部分(TP+29.2m前後)から0.6m以下で堤体構成層とみられる土層(2~5層)を確認した。特に5層には瓦片が多量に含まれている状況を確認した。

[内法面A・B地点] 法面上端部分(TP+29.7m前後)から0.58~0.75m以下で堤体構成層とみられる土層(2~13層)を確認した。0.05~0.2m前後の主に茶灰色~黄灰色の砂・礫混の砂質土を盛ったとみられる土層である。

[取水施設設置部分] TP+25.2m以下で上から灰緑色粘土層、淡灰緑色粘砂層、暗灰緑色砂層の堆積が



第5図 調査地周辺図(1/5000)



第6図 調査区設定図(1/400)

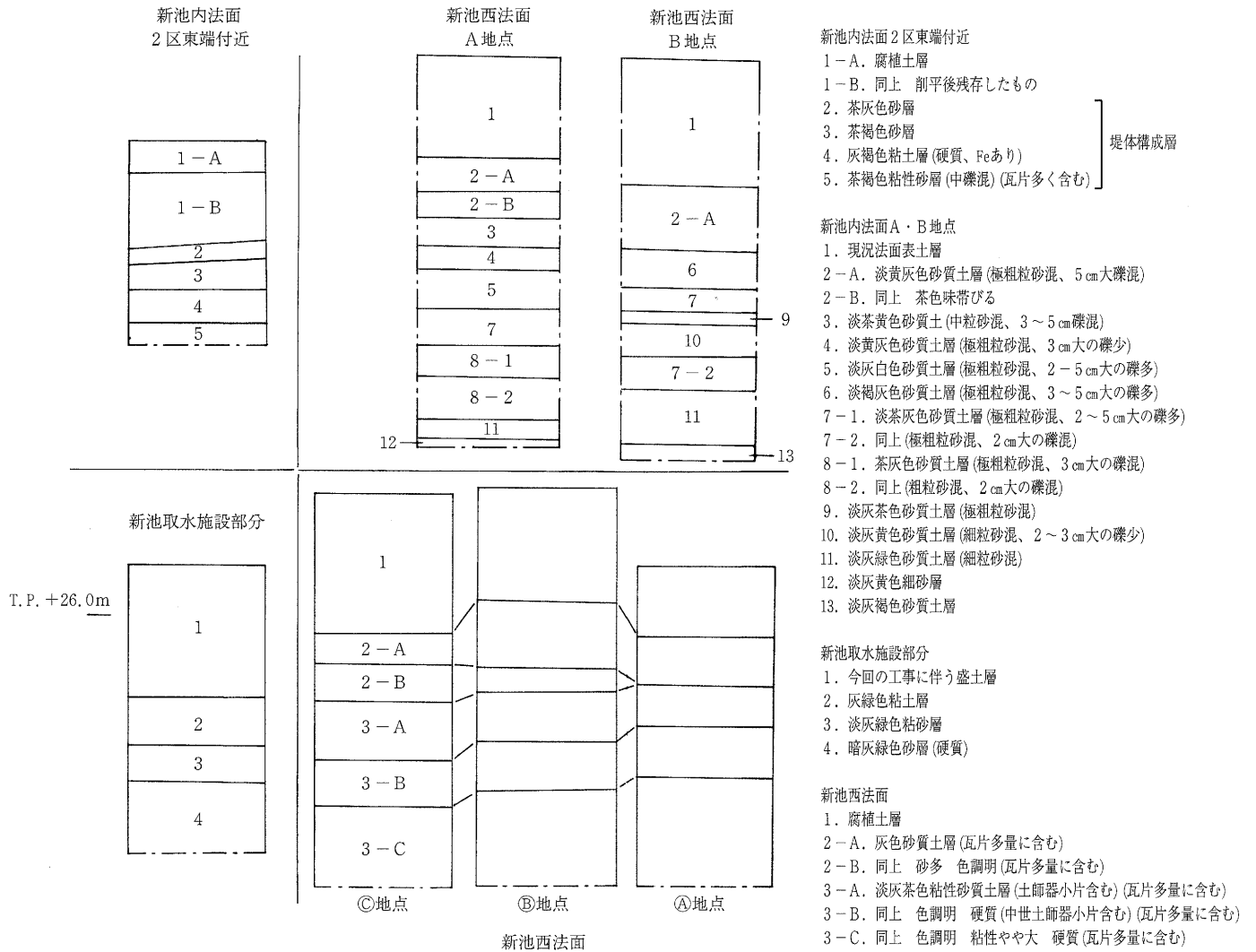
みられた。出土遺物は確認できなかった。暗灰緑色砂層は新設樋管の底面レベルより下位にある。硬質な土層である。

〔西法面〕TP+27m前後以下で堤体構成層とみられる灰色砂質土（2-A・2-B層）、淡灰茶色粘性砂質土層（3-A・3-B・3-C層）を確認した。これらの土層には瓦片が多量に含まれている状況がみられた。また3-B層には中世とみられる土師器片が少量含まれていた。

〔まとめ〕今回の調査は部分的ではあるが、新池西側の旧堤体層の状況を確認することができた。また腐食土層のみの除去であったにも関わらず、7世紀後半以降の瓦が100点余り出土し、そのなかには鎌倉時代後期頃とみられる軒丸瓦が含まれていた。これは心合寺廃絶後の包含層を削平して、新池西側の旧堤体が構築されたことを示すものである。近接して心合寺跡の遺構の存在する可能性も予想され、注意される。

なお、本稿の1～4の原稿については、吉田が記述した。版下、観察表の作成を含めた出土遺物の整理と「5. 出土遺物」の記述は、吉田の指導のもと花園大学文学部史学科卒業生、周藤光代が行った。

(吉田野乃)



第7図 土層断面柱状図 (1/40)

分類名 地区名	斜格子		不整格子		格子目		縄目→格子		特殊叩き		縄目		スリケシ		平行条線文		不明	合計(点)	
	A類		B類		C類		D類		E類		F類		G類		H類				
	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2	1	2			
内法面A・B地点		3	2	2	2							5	7			1		6	28
内法面1区				1								1							2
内法面2区			1	1												1			3
内法面3区										1	3	2						2	8
西法面		1				2						2	1					2	8
開削部付近			1			3		1				4	3	3	1	5		9	30
合計(点)		4	4	4	2	5		1		1	15	13		3	3	5		19	79
		4		8		7		1		1		28		3		8		19	
比率(%)		5		10		9		1		1		35		4		10		25	100

本文表 平瓦の叩き目 類型別・地区別点数表

5. 出土遺物

今回の調査では、出土遺物は表面採集によるものがほとんどであるため、層位的な遺物の検討をすることはできなかった。今回の出土遺物は瓦が中心で、なかでも平瓦が多い。瓦はいずれも破片のため、正確な法量・製作技法を知るには限界のある資料である。類型化のできないものも含め瓦は総数103点出土している。その内訳は平瓦79点、丸瓦23点、軒丸瓦1点である。地区別にみると、内法面A・B地点（平瓦28点、丸瓦3点）、内法面1区（平瓦2点、丸瓦1点）、内法面2区（平瓦3点、丸瓦1点）、内法面3区（平瓦8点、丸瓦5点）、西法面（平瓦8点、丸瓦3点）、開削部付近（平瓦30点、丸瓦11点）となっている。

〔平瓦〕凸面の調整技法により類型化を行い、類型別、地区別に点数を計数した（6頁、本文表）。今回の類型化作業は出土資料がすべて破片資料であるため、精度に欠くものであるが、大要を掴む資料とするため敢えて試みた。凸面の調整技法から下記の8類に分類した。また叩き目の擦り消しの有無からスリケシ有り〔1〕、スリケシ無し〔2〕に細分した（例：斜格子目タタキのちスリケシ…A1類）。

- A類 斜格子目タタキ（A2類…第8図5・7）
- B類 不整格子目タタキ（B2類…第8図1）
- C類 格子目タタキ
- D類 縄目タタキのちスリケシのち格子目タタキ（D2類…第9図11）
- E類 特殊タタキ（E2類…第8図2）
- F類 縄目タタキ（F1類…第8図3・4・第9図12・13 F2類…第8図8）
- G類 スリケシ（第10図17）
- H類 平行条線状タタキ（H2類…第9図14）

類型化できないものが全体の25%を占めるが、類型化できたものでは、出土比率の多いものからF類が35%、B類・H類が共に10%、C類が9%、A類が5%、G類が4%、D類・E類が1%である（本文表）。今回の資料はすべて破片であったため原体の形状・大きさなど確認することができず、原体単位の刻線の文様を明らかにすることはできなかった。特にH類は約0.4cm間隔の平行の条線に見えるが、原体の全体が不明のため緩杉文タタキの可能性もある。E類は特殊タタキとしたが、原体の小口が強く押圧された痕跡を残しており、これが特殊なタタキ目状に残っている。タタキの文様は丁寧に擦り消されほとんど残っていない。ほとんどの瓦が小破片のため断言はできないが、側端面の調整・傾斜角、全体の曲率の強弱から7・11・15は桶巻き作り、2・5・8・13・14は一枚作りと判断した。

凹面の布目痕は7～11本/cmのものがみられ、なかでも10本/cmの布目痕を持つものが大半を占めている。10本/cmの布目を残す平瓦のほとんどは布目がはっきり残り、模骨痕の残るものが多い。模骨痕の幅が確認できたものでは2.1～3.8cmの幅に収まる。布目を擦り消すものにはF類に多くみられる。

A～C・E・G類はタタキ原体以外の調整技法が共通することから、これら5類はほぼ同時期の所産と考えられる。D類は確認できたものが1点のみの出土である。D類は上記の5類に後出するF類の縄目タタキを擦り消したあとにC類の格子目タタキの原体を重ねている。今回検討した資料は破片のため製作工程や原体の大きさが不明であること、また、一枚の平瓦に原体が一種類なのか、D類のように複数なのかといった問題が残る。平瓦の時期を明確にしうる状況ではないが、以上の所見をもとに、類型ごとの所属時期を求めると下記のようなになる。

A・B・C・E・G類…7世紀第3四半期～8世紀第1四半期

F類…7世紀第4四半期以降

〔丸瓦〕丸瓦は4点のみ実測可能であった（第8図6・第9図9・10・第10図16）。6は凸面のタタキメが丁寧に擦り消されているため、タタキ目の種類は不明である。他3点は凸面を縄目タタキで叩いたあと丁寧にスリケシを行うという共通の調整方法をとっている。また、図化することができなかった19点中13点に凸面に縄目タタキののちスリケシがされていることから、6にも縄目タタキが施されていた可能性が高い。図化できた4点とも破片のため行基式か玉縁式かの判断は難しいが、9は行基式丸瓦6・

16は玉縁式丸瓦の可能性があり、丸瓦は図化できなかった19点のなかでかろうじて判断できたものでは、行基式丸瓦が8点、玉縁式丸瓦が7点である。図化できなかったものも含め今回出土した丸瓦の凸面には3～5本/cmの縄目タタキが施されており、凹面の布目痕は7～11本/cmである。

〔軒丸瓦〕18は三巴文軒丸瓦である。開削部付近で表面採集されたものである。内区には右巻きの巴文を配している。巴文の尾部は細くて長く、圏線状をなす。外区にはやや密に26の隆起の小さい小粒の珠文がめぐらされている。文様区径12.3cm、珠文直径0.6cm 珠文厚0.2cm 巴頭部厚0.3cmである。珠文の内側に一重の圏線を施している。周縁は突出した素文の直立縁で幅2.1cm、高さ1.4cmである。丸瓦部の凸面の調整はナデを施して丁寧^(註1)に仕上げられている。三つの巴文の頭部がおのおの独立し、丸みを帯びているなどの特長から、鎌倉時代後期頃に位置づけられる^(註1)。胎土は花崗岩や金雲母などを多く含むことから在地産の可能性があり。

〔まとめ〕平成9年度の調査と同様、今回出土した瓦は層位的な検討を行い得るものではなかった。心合寺の瓦の時期は、白鳳時代から鎌倉時代に及んでいる。今後この遺跡の調査の進展により、層位的な裏づけをもった検討が行われる事を期待したい。

最後に、これまで心合寺から出土した軒丸瓦、軒平瓦について紹介しておく。白鳳時代では単弁八葉蓮華文で、八本の軸よりなる車輪状の中房をもつ、心合寺独自の瓦当文様の軒丸瓦がある。奈良時代では八個の蓮子を配する中房をもつ、複弁八葉蓮華文、複弁七葉蓮華文の軒丸瓦がある。奈良時代後期から平安時代にかけてのものには、白鳳時代の心合寺独自の瓦当文様の系譜をひき、外区に珠文をめぐらせる単弁八葉蓮華文軒丸瓦がある。また、鎌倉時代の軒丸瓦では三巴文軒丸瓦、二巴文軒丸瓦などが出土している。軒平瓦では、左巻きの二巴文軒丸瓦と組み合わせ使用されたと思われる、同じ左巻きの二巴文を一単位とする文様を持つ鎌倉時代の軒平瓦が出土している。他に珠文を内区に持つ鎌倉時代の軒平瓦なども出土している^(註2)。

註1 市本芳三「摂河泉における古代末・中世瓦の様相—堺市日置荘遺跡出土瓦を中心に—」『研究紀要』vol. 1 大阪府文化財センター 1993年

註2 原田修・久貝健・島田和子「高安の遺跡と遺物」『大阪文化誌』第2巻第2号通巻第6号 大阪文化財センター 1976年

〔参考文献〕

花田勝広・田中久雄『鳥坂寺—寺域の調査—』柏原市教育委員会1995年

藤井寺市教育委員会『藤井寺市及びその周辺の古代寺院（上）』1987年

佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58—2 1972年

森郁夫『瓦』ニュー・サイエンス社 1986年

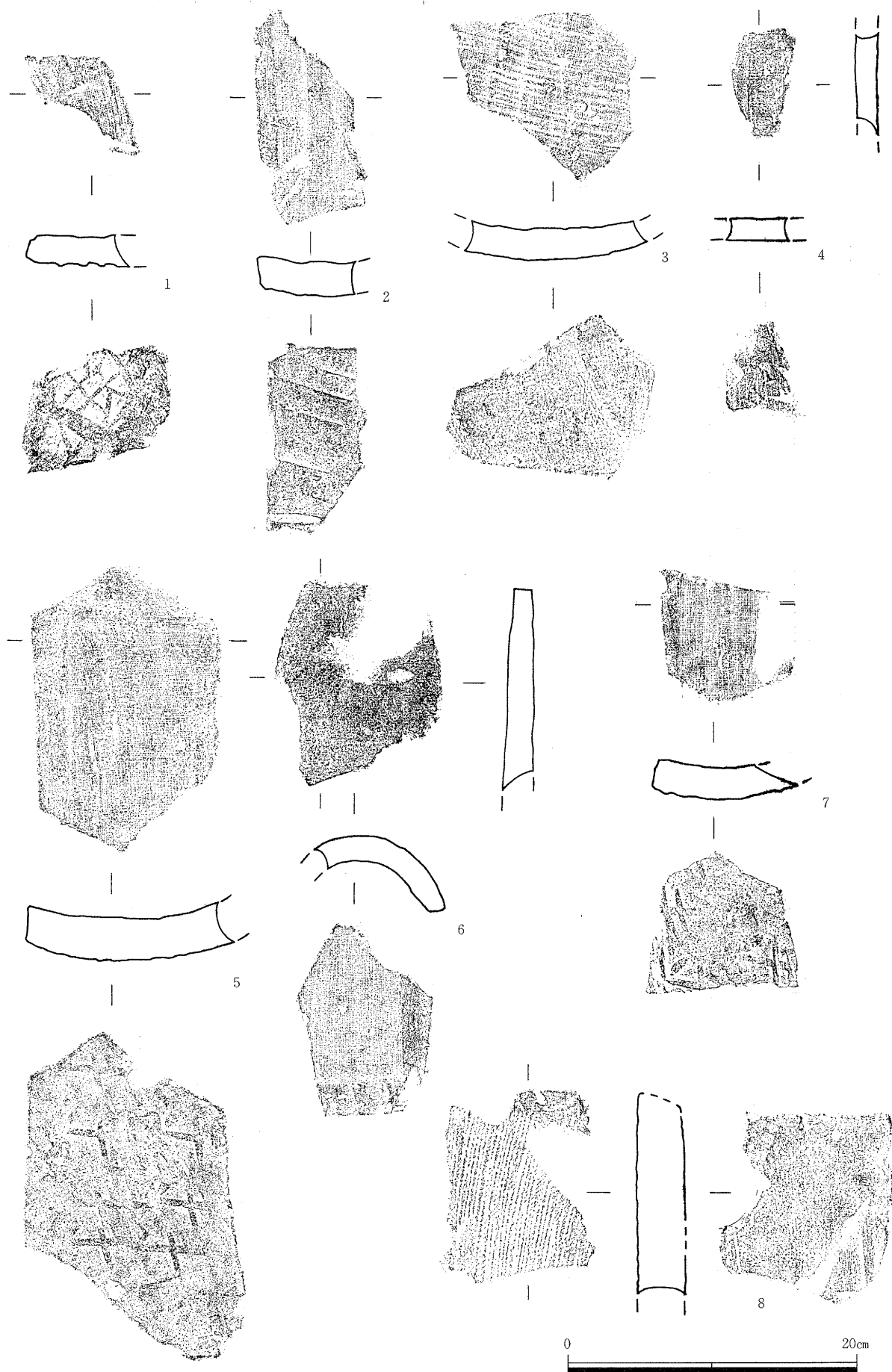
湊 斎「東郷廃寺発掘調査報告」『八尾市文化財紀要』7 八尾市教育委員会 1997年

八尾市史編集委員会『八尾市史』（前近代）本文編 1988年

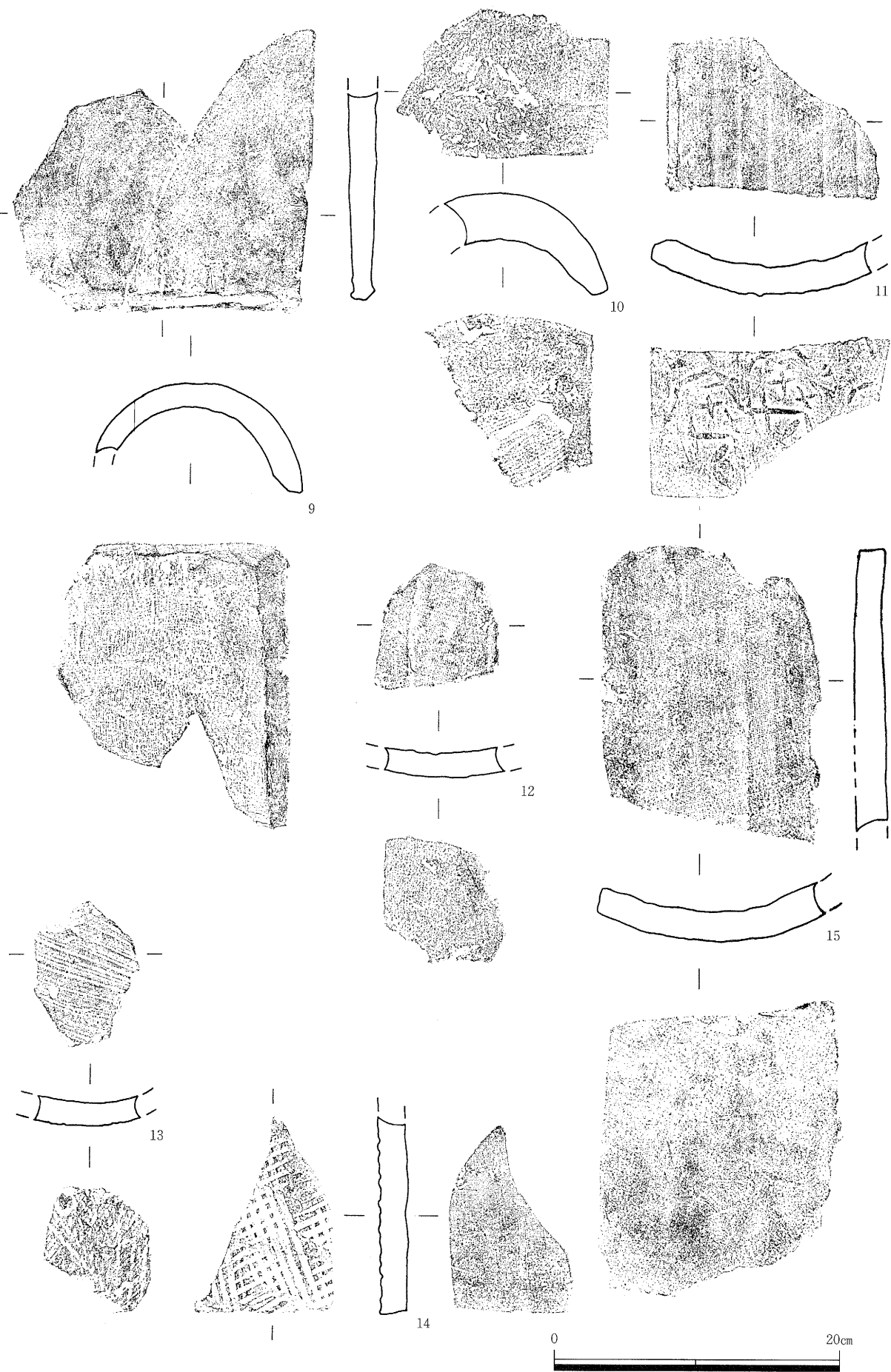
小林行雄『続古代の技術』塙書房1964年

大阪府教育委員会『新堂廃寺発掘調査概要Ⅱ』1997年

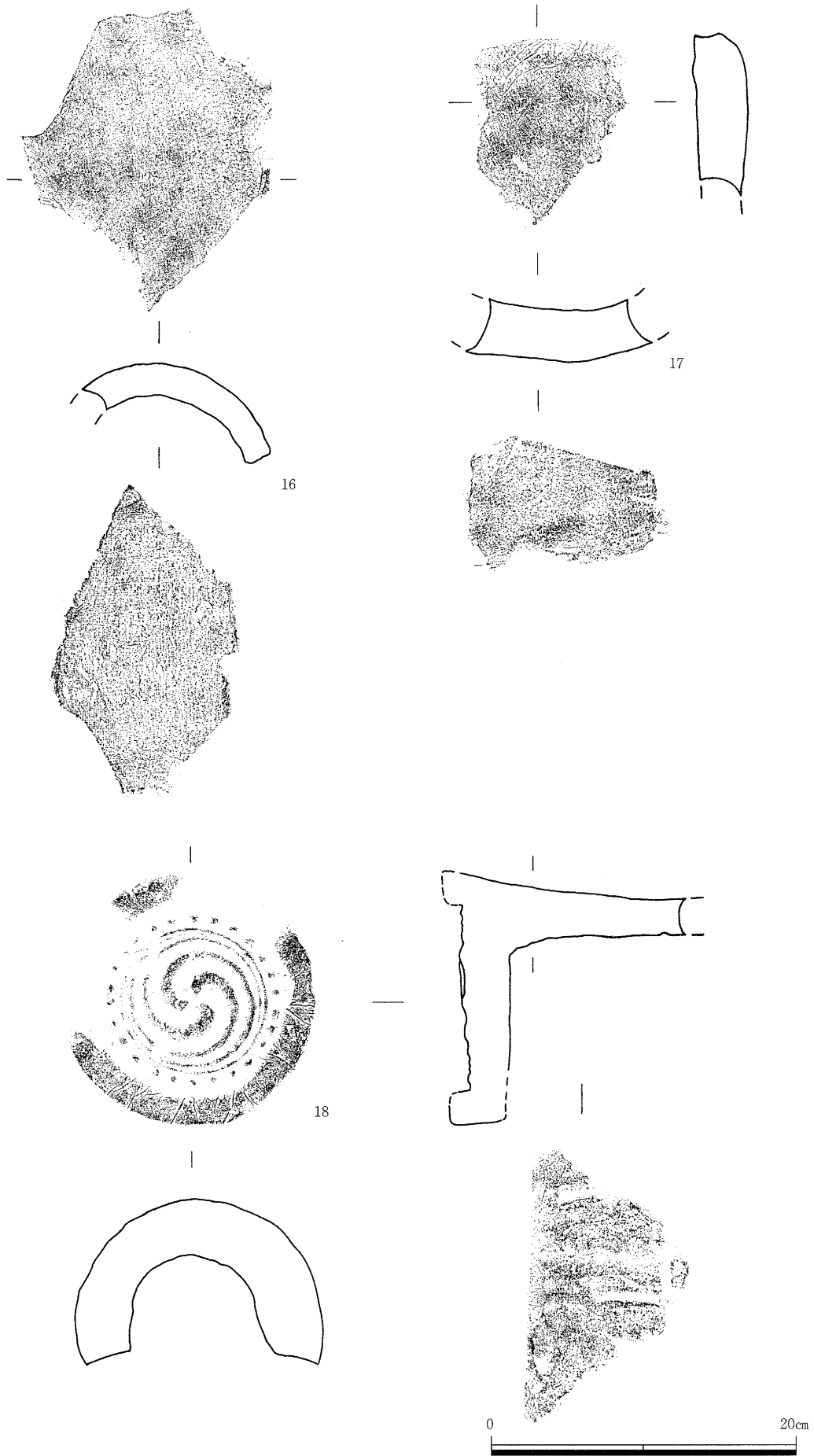
八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成9年度発掘調査報告書』1998年



第8图 出土遺物実測図一1 (1/4)



第9图 出土遺物実測図一2 (1/4)



第10図 出土遺物実測図一3 (1/4)

調査区	器種	番号	法量(cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土	胎土組成
新池内法面 1区	平瓦	1	残長(短軸):9.7 最大厚:2.2	凸面:格子目タタキ 凹面:布目痕(10本/cm)	凸面:にぶい橙色(7.5YR6/4) 凹面:灰黄色(2.5Y6/2)	硬	粗	長石+石英:~7mm多 長石+黒雲母:~7mm多 クサリ礫:~5mm多
新池内法面 3区	平瓦	2	残長(短軸):7.1 最大厚:2.4	凸面:タタキのち短軸方向ナデ 凹面:布目痕(約10本/cm) 側端面付近長軸方向ケズリの ち同方向のナデ 側端面:長軸方向ケズリ	凸面:にぶい黄橙色(10YR/3) 凹面:灰黄色(10YR6/2)	やや軟	粗	長石+石英:~5mm多 角閃石:~5mm極少 クサリ礫:~2mm極少 金雲母:極少
新池内法面 A・B地点	平瓦	3	残長(短軸):13.0 最大厚:2.25	凸面:縄目タタキ(4本/cm)のち不定 方向ナデ 凹面:布目痕(約10本/cm)一部不法ナ デ、糸切り痕跡 粘土継目痕あり	凸面:褐灰色(7.5YR6/1) 凹面:褐灰色(10YR6/1)	硬	やや粗	長石+石英:~3mm多
新池内法面 3区	平瓦	4	残長(短軸):4.8 残長(長軸):6.7 最大厚:1.6	凸面:縄目タタキ(5本/cm)のち不定 方向ナデ 凹面:長軸方向ケズリのち短軸方向 ナデ	凸面:灰黄色(2.5Y6/2) 凹面:灰黄色(2.5Y6/2)	硬	やや粗	長石+石英:~2mm少 クサリ礫:~3mm少 金雲母:極少
新池内法面 A・B地点	平瓦	5	残長(短軸):14.7 最大厚:2.9	凸面:一格子目タタキのち不定方向 ナデ 布目痕(約9本/cm)のちナデ 側端面付近:長軸方向ケズリのち同 方向ナデ	凸面:にぶい黄色(2.5Y6/3) 凹面:灰黄色(2.5Y6/2)	やや軟	やや粗	長石+黒雲母:~8mmや や多 長石+石英:~8mmやや多 金雲母:少 角閃石または黒雲母板
新池内法面 A・B地点	丸瓦	6	残長(短軸):8.4 残長(長軸):14.6 最大厚:1.7	凸面:短軸方向ナデ 凹面:布目痕(9本/cm)側端面付近長 軸方向ケズリ 側端面:長軸方向ケズリ	凸面:灰色(5Y5/1) 凹面:灰色(5Y5/1)	やや軟	粗	長石+石英:~5mm多 長石:~8mm多 金雲母:非常に多
新池西法面	平瓦	7	残長(短軸):10.7 最大厚:2.2	凸面:一格子目タタキ一部不定方向ナ デ 凹面:布目痕(約9本/cm) 側端面:長軸方向ケズリのち同方向 ナデ	凸面:灰色(5Y5/1) 凹面:灰色(7.5Y5/1)	硬	非常に粗	長石+石英:~1cm非常 に多 金雲母:極少
新池西法面	平瓦	8	残長(短軸):14.8 最大厚:3.3	凸面:縄目タタキ(3本/cm)短側部付近 短軸方向ケズリ後同方向ナデ 凹面:布目痕(9本/cm)長軸方向のケ ズリ後同方向ナデ 側端面付 近長軸・短軸方向ケズリ 側端面:短軸方向ケズリ後同方向ナ デ	凹面:黄灰色(2.5Y6/1) 凸面:灰黄色(2.5Y6/2)	硬	粗	長石+石英:~5mm多 金雲母:少 クサリ礫:~1mm極少 黒雲母:極少 角閃石:極少
新池西法面	丸瓦	9	残長(短軸):15.0 残長(長軸):14.9 最大厚:2.9	凸面:縄目タタキ後不定方向ナデ短 側部付近短軸方向ナデ 凹面:布目痕(約8本/cm)短側部付近 長軸方向ナデ 側端面:長軸方向ケズリ後同方向ナ デ凹面の一部に及ぶ	凸面:灰色(5Y4/1) 凹面:黄灰色(2.5Y4/1)	やや軟	粗	長石+石英:~7mm多 石英:~8mm多 クサリ礫:~3mm少量 金雲母:少
新池西法面	丸瓦	10	残長(短軸):9.4 最大厚:3.3	凸面:縄目タタキ(4本/cm)後長軸方 向ナデ短側部付近のみ短軸方 向ナデ 凹面:布目痕(9本/cm)短軸方向ケズ リ 側端面:長軸方向ケズリ後同方向ナ デ	凸面:黄灰色(2.5Y5/1) 凹面:黄灰色(2.5Y6/1)	軟	粗	長石+石英:~3mm少 長石:極少 クサリ礫:極少 金雲母:極少
新池開削部付近	平瓦	11	残長(短軸):15.7 最大厚:2.1	凸面:縄目タタキ(約3本/cm)後格子 目タタキ後不定方向ナデ 凹面:布目痕(約10本/cm)桶巻痕残 存	凸面:黄灰色(2.5Y5/1) 凹面:黄灰色(2.5Y6/1)	硬	粗	長石+石英:~8mm多 角閃石:~8mm少 金雲母:~7mm極少
新池開削部付近	平瓦	12	残長(短軸):8.2 最大厚:1.85	凸面:縄目タタキ(約5本/cm)後不定 方向ナデによるスリケン 凹面:布目痕(約10本/cm)後不定方 向ナデ	凸面:黄灰色(2.5Y6/1) 凹面:黄灰色(2.5Y6/1)	硬	粗	長石+石英:~6mm多 クサリ礫:~2mm極少 チャート:~2mm極少
新池開削部付近	平瓦	13	残長(短軸):7.8 最大厚:1.8	凸面:縄目タタキ(約2本/cm)後長軸 方向に対してナメ方向ナデ 凹面:布目痕(約10本/cm)位糸切り 痕残存	凸面:灰色(5Y4/1) 凹面:灰色(7.5Y5/1)	非常に軟	非常に粗	長石:~1.5cm多 チャート:~5mm少 石英:~3mm少 金雲母:極少
新池開削部付近	平瓦	14	残長(長軸):14.2 最大厚:2.0	凸面:綾杉?タタキ 凹面:布目痕(約11本/cm)短軸方向 ヘラケズリ後同方向ナデ 側端面:短軸方向のヘラケズリ後同 方向ナデ	凸面:黄灰色(2.5Y7/2) 凹面:黄灰色(2.5Y6/2)	やや硬	粗	長石+石英:~8mm多 金雲母:1mm少 黒雲母:少
新池開削部付近	平瓦	15	残長(短軸):16.8 残長(長軸):20.4 最大厚:2.4	凸面:不明タタキ後短軸方向ケズリ 後不定方向ナデ 凹面:布目痕(約7本/cm)糸切り痕残 存 側端面:側端面~凹凸面側長軸方 向ケズリ後同方向ナデ	凸面:にぶい黄橙色(10YR7/3) 凹面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	やや軟	粗	長石:6mm多 クサリ礫:3mm少 金雲母:少 角閃石?:~2mm極少
新池開削部付近	丸瓦	16	残長(短軸):11.5 最大厚:2.1	凸面:縄目タタキ(5本/cm)後不定方 向ナデ 凹面:布目痕(約8本/cm) 側端面:長軸方向ケズリ	凸面:にぶい褐色(7.5YR5/4) 凹面:にぶい褐色(10YR6/3)	硬	非常に粗	長石+石英:~1.5cm多 クサリ礫:~5mm多 石英:~6mm少 長石:~3mm少
新池開削部付近	平瓦	17	残長(短軸):8.7 残長(長軸):12.1 最大厚:3.55	凸面:不定方向ナデ 凹面:不定方向ナデ 側端面付近短 軸方向ナデ 側端面:短軸方向ケズリ後同方向ナ デ 凸面の一部に及ぶ	凸面:黄灰色(2.5YR5/1) 凹面:灰色(5Y6/1)	軟	粗	長石+石英:5mm多 長石:~5mm多 石英:少 金雲母:極少 クサリ礫:極少
新池開削部付近	軒丸瓦	18	瓦当厚:3.0 瓦当直径:16.9 体部厚:4.1 残長:10.2	凸面:板状工具による?短軸方向ナ デ後長軸方向ナデ 凹面:布目痕(約10本/cm)後短軸方 向ナデ 側端面:長軸方向ナデ 瓦当裏面:不定方向ナデ	外面:灰色(5Y6/1) 内面:(7.5Y6/1)	やや軟	粗	長石:1cm非常に多 チャート:~5mmやや多 石英?:やや多 金雲母:やや多

出土遺物観察表

3. 史跡心合寺山古墳(現状変更)の調査

1. 調査地：八尾市大竹4丁目地内
2. 調査期間：平成11年3月1日・10日・19日
3. 調査方法

八尾市養護老人ホームの撤去に伴い、八尾市高齢福祉課より、平成10年8月25日付で文化庁宛に申請がなされ、平成10年9月8日付で八尾市教育委員会文化財課の立会を行う条件付で許可がなされた。これに基づき、八尾市教育委員会文化財課では、平成11年3月1日に建物基礎撤去に伴う立会調査を、同年3月10日に東側建物北の浄化槽撤去及び、観音池堤体法面表土除去に伴う立会調査を、同年3月19日に西側建物の北部分の浄化槽撤去に伴う立会調査を行った。建物基礎の撤去は地表下1.0mまでの掘削で、建物建設時の攪拌層のみを確認し、建物建設時の基礎掘り方の範囲で、撤去が行われていることを確認した。ここでは現代以前の土層断面の状況がある程度確認することのできた、東側建物北の浄化槽撤去に伴う立会調査及び、観音池法面表土の除去に伴う立会調査について記述する。

4. 調査概要

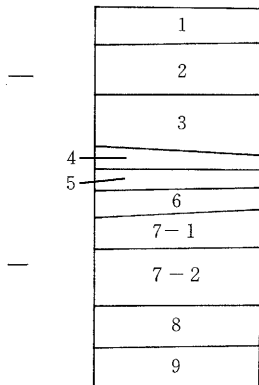
[東側建物北の浄化槽撤去に伴う立会調査(A地点)]

撤去される浄化槽の位置は養護老人ホーム東側建物の北側に近接する。これは心合寺山古墳の現況墳丘の前方部前端付近になる。さらに現在までの史跡整備に伴う発掘調査の成果から推定される墳丘プランでは、3段築成の上段から数えて3段目の平坦面の北端から上方への立ち上がり付近にあたる位置である。現況の地表面の高さはT.P. +29.9m前後、これまでの調査で確認されている第3段目平坦面の標高は、T.P. +28.5~T.P. +28.9m前後である。浄化槽の大きさは東西長5.4m、南北長2.1mであり、これを撤去するために東西長5.5m、南北長2.5m前後の範囲で、深さ3.6mまで掘削がなされた。浄化槽撤去に伴う掘り方の北壁部分と、西壁部分で土層観察を行った。北壁部分では地表下1.74mまで確認した。現地表面の標高はT.P. +29.86mであり、地表下0.7mまで現況水路の掘り方埋土、地表下1.2mまで真砂土層、旧表土層、灰色粘土層が堆積し、この下、T.P. +28.66m以下で墳丘構成層の可能性のある土層を確認した。このうち黄褐色粘砂層、灰青色砂混粘砂層は墳丘盛土層の可能性があるが、判然と

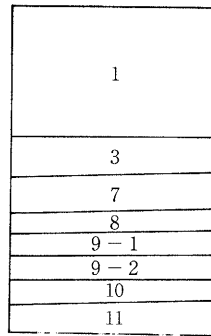


第11図 調査地周辺図(1/5000)

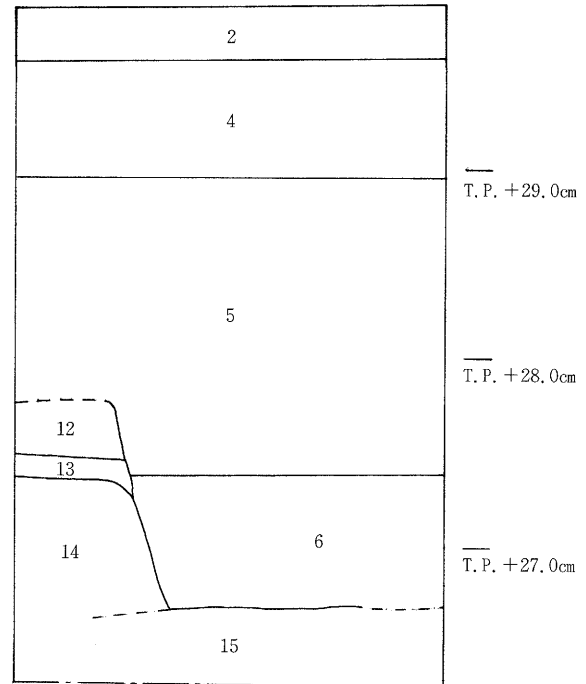
観音池堤体南法面
切土部分
(B地点)



東側浄化槽部分北壁
(A地点)



東側建物浄化槽部分西壁
(A地点)



観音池堤体南法面切土部分

1. 表土層(茶灰色砂層)(現代)
2. 黄灰色砂層(コンクリート混)(現代)
3. 茶灰色砂、灰黄色砂の攪拌層(現代)
4. クラッシャー(現代)
5. 灰茶色粘性砂層(旧表土層?)(現代)
6. 茶灰色小礫混砂質土層
- 7-1. 明灰色粘性砂層(灰紫色粘砂ブロック)
- 7-2. 同上~5cm礫含む(灰紫色粘砂ブロック)
8. 茶灰色粘質土(Fe斑)(旧耕作土?)
9. 褐色斑灰白色砂質土層

浄化槽部分

1. 既設水路掘り方埋土(現代)
2. 茶灰色砂質土(表土)(現代)
3. 黄灰色小礫混砂層(真砂土か)(現代)
4. 黄灰色層、黄灰茶色砂の攪拌層(現代)(浄化槽掘り方埋土)
5. 灰青色粘砂、灰茶色砂の攪拌層(現代)(浄化槽掘り方埋土)
6. 灰色粘砂層(現代)(浄化槽掘り方埋土)
7. 淡灰色小礫混粘砂層(旧表土層)
8. 灰色粘土層

- 9-1. 黄褐色粘砂層
- 9-2. 同上 砂多
10. 灰青色砂混粘砂層
11. 暗灰色粘土
12. 灰紫色微砂質粘砂層
13. 灰黄色微砂層
14. 灰緑色微砂層
15. 暗灰緑色粘土層
(~5cmの花崗岩小礫多 有機物混 硬質)

第12図 調査区土層断面柱状図(1/40)

しない。西壁部分では幅2m程度の範囲の土層断面を観察した。ここでは、壁面崩壊の危険があったため、地表からの観察、計測を行うに留めた。地表下0.9mまで老人ホーム建設時の整地層かとみられる黄灰色砂層であり、これ以下、地表下3.2mまで浄化槽の掘り方埋土であった。西壁南側の地表下2.1m以下、T.P. +27.77m以下にプライマリーな土層が遺存していた。上から灰紫色微砂質粘砂層、灰黄色微砂層、灰緑色微砂層、暗灰緑色小礫混粘土層(有機物混)である。この土層の性格については限界のある調査での観察であり、明確に位置付けることは難しい。土層の状況から水性堆積とみられること、廃土での確認であるが、出土遺物がみられなかったこと、位置的にみて周濠埋土の堆積とは考えられないことから、墳丘築造以前の旧谷地形に堆積した土層である可能性がある。また墳丘最下段裾の高さはT.P. +27.0m前後に推定されることから、心合寺山古墳の第3段目平坦面を構成する土層の少なくともT.P. +27.77m以下は旧地形を構成する土層を整形して造られている可能性がある。

〔観音池法面表土の除去に伴う立会調査(B地点)〕

観音池南辺東端にあたる現況堤体の南側法面の除去に伴い立会調査を行った。幅0.9mの範囲を堤体上面から深さ2.0m前後まで確認した。堤体上面の高さは約T.P. +29.3m前後である。地表下0.85mまでコンクリート混の土層、クラッシャー等であり、現在の堤体内法面コンクリート保護がなされた時のものとみられる。この下の地表下0.9m前後には旧地表とみられる灰茶色粘性砂層が堆積しており、以下、地表下1.56mまで茶灰色小礫混砂質土層、明灰色(灰紫色微粘砂ブロック混)粘性砂層が続く。これらの土層は、心合寺山古墳の墳丘構成層に類似しており、墳丘を削平して堤体の盛土を行った痕跡である可能性があるが、遺物は確認できず、時期は不明である。この下には褐色斑茶灰色砂質土層、褐色斑灰白色砂質土層が堆積し耕作土層かともみられるが、出土遺物は確認できず、時期は判然としなかった。

(吉田野乃)

4. 跡部遺跡(99-132)の調査

1. 調査地：八尾市太子堂2丁目地内
2. 調査期間：平成11年7月1日～10月5日
3. 調査方法

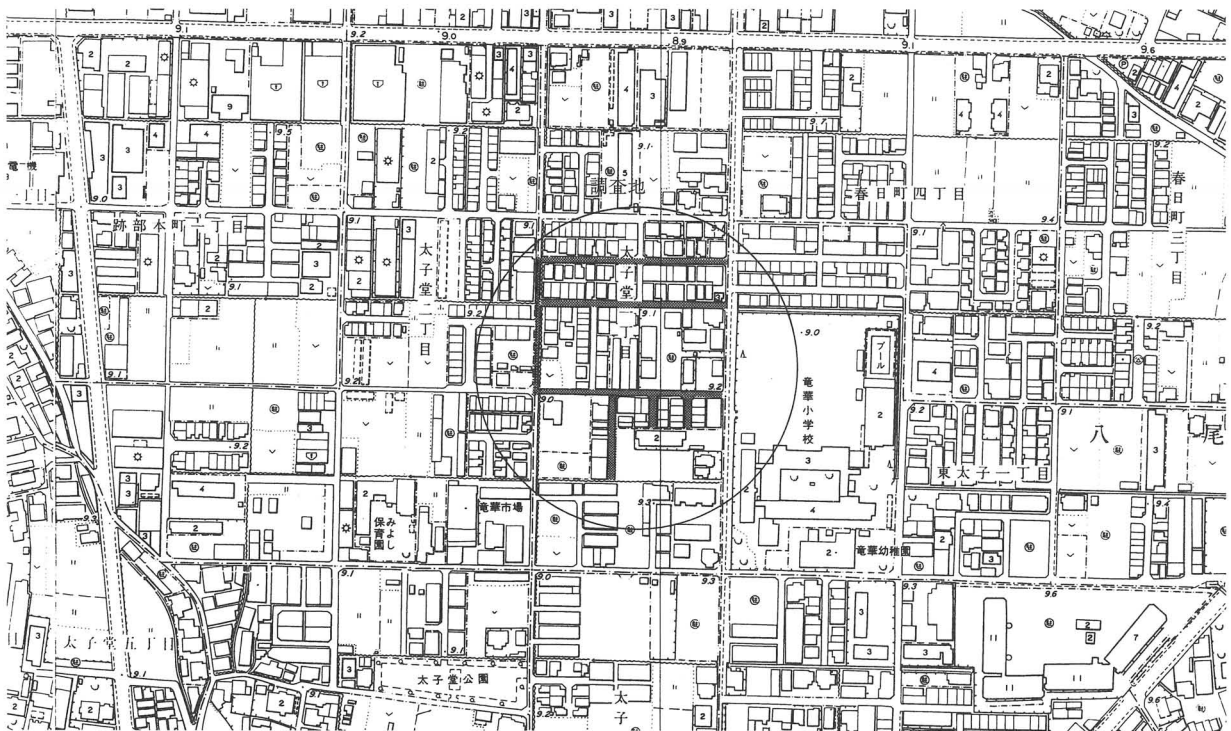
下水道管埋設に伴い、人孔設置部分の2×2mの範囲で8か所と管路部分1か所の計9か所を、機械と人力を併用して調査を行った。

4. 調査概要

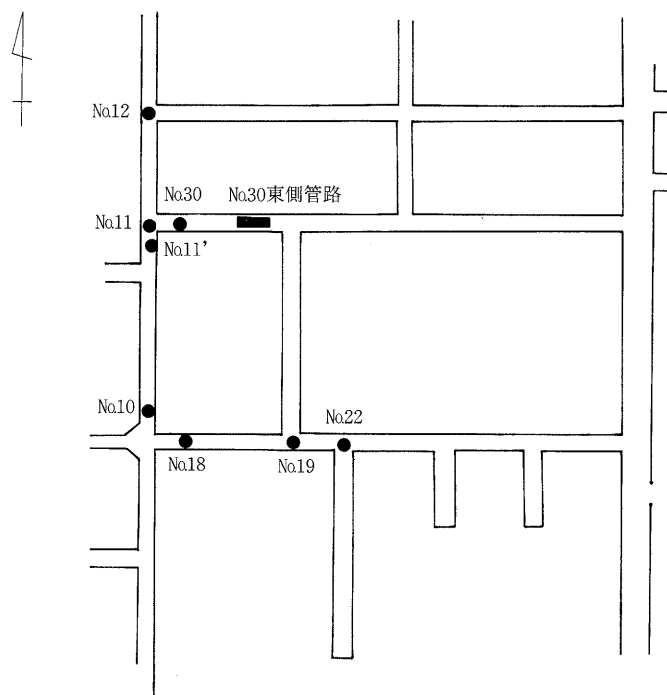
[No10人孔] 地表下1.4m前後、T.P. +7.54m前後の黄褐灰色粘土A層上面でピット2基を検出した。SP1は長径0.46m前後を測る楕円形のピットで埋土は灰色粘砂層、土師器小片を含む。SP2は長径0.2m前後を測る不整地楕円形のピットで埋土は灰褐色粘砂層、土師器小片を含む。ピットの深さは0.1～0.15mである。出土土器片の時期は不明である。遺構面構成層である黄褐灰色粘土A層自体にも古墳時代以降の土師器小片が若干量含まれていた。さらにこの下の地表下1.77～2.0m、T.P. +7.28～6.95mで古墳時代前期の土師器片を含む暗灰色有機物混微砂質粘土層を確認した。ここでの遺物の出土状態は全体に密に含まれる状態ではなく、部分的にまとまった状態での出土である。出土遺物で器種の判明しているものは、土師器の短頸壺(1)、布留式中段階頃の甕(2)、タタキののちにハケメを施す土師器もしくは弥生時代後期とみられる土器片2点、壺とみられる土師器片2点等である。2はかなり残りの良い状態で出土した。土層の状態から溝もしくは低湿状の地形の落ち込み等の堆積層とみられる。上方から廃棄された状態を確認したものと思われる。この下は地表下2.0m以上、淡灰緑色粘性微砂層が続いている。遺物の出土はないが、上層の古墳時代前期の土器片を含む土層と同一の遺構もしくは低湿地状の落ち込みの堆積層とみられる。

[No12人孔] 地表下1.6～1.7m、T.P. +7.4～7.3mで土師器片を若干量含む土層を確認した。さらにこの直下地表下1.7～2.16m、T.P. +7.3～6.8mでNo10人孔において確認した古墳時代前期の遺物を含む土層と対応するかとみられる暗灰色微砂質粘土を確認した。ここからは古墳時代前期の土師器片が少量出土している。この土層の直下は淡灰緑色粘性微砂層であり、No10人孔と対応する土層かとみられる。

(吉田野乃)



第13図 調査地周辺図(1/5000)



第14図 調査人孔位置図(1/2000)

〔No.11人孔〕 地表下1.45～1.6m (T.P. +7.3～7.45m)の暗褐色シルト層から土師器の小型丸底壺が出土しており、古墳時代(布留新段階)頃の包含層と考えられる。この層以下約0.4mは粗砂層となり、河川堆積層であろう。また地表下2.0m (T.P. +6.75m)前後で暗褐色粘土層がみられ、包含層となる可能性がある。

〔No.11'人孔〕 地表下1.4～1.6m (T.P. +7.3～7.5m)の暗褐色シルト層から土師器小片(布留甕)が出土しており、古墳時代(布留新段階)頃の包含層と考えられる。この層以下約0.55mは粗砂層となり、河川堆積層であろう。

〔No.18人孔〕 地表下1.85～2.0m (T.P. +7.0～7.15m)で暗灰色シルト層がみられ、西側にあるNo.10人孔で検出されている包含層に対応すると考えられる。

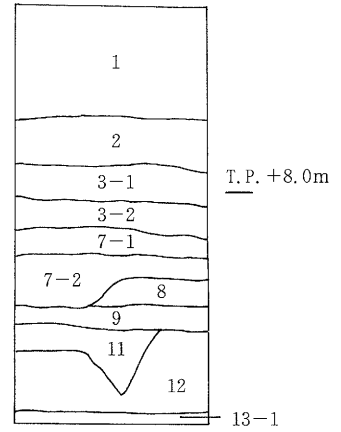
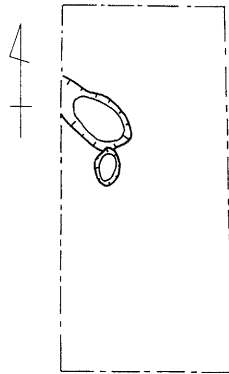
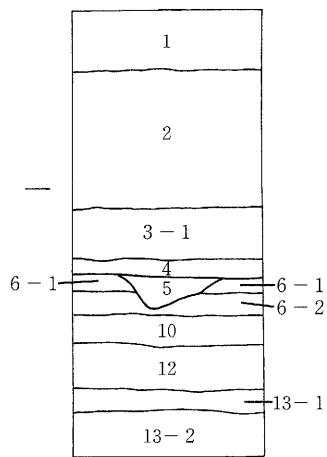
〔No.19人孔〕 地表下2.0～2.25m (T.P. +6.95～7.2m)で暗灰色小礫混シルト層がみられ、西側にあるNo.10人孔で検出されている包含層に対応すると考えられる。

〔No.22人孔〕 地表下2.1～2.3m (T.P. +6.9～7.2m)で暗灰色小礫混シルト層がみられ、西側にあるNo.10人孔で検出されている包含層に対応すると考えられる。

〔No.30人孔〕 : 地表下1.85～2.0m (T.P. +7.0～7.15m)の暗灰色微砂シルト層から弥生土器の甕の底部が出土しており、弥生時代の包含層と考えられる。

〔No.30人孔東側管路部分〕 地表下1.45～1.6m (T.P. +7.4～7.55m)で灰色小礫混微砂シルト層がみられ、地表下1.75～2.0m (T.P. +7.0～7.25m)で暗褐色シルト質粘土層がみられる。遺構や遺物は確認できなかったが、近隣の調査例からそれぞれ古墳時代(布留中～新段階)と弥生時代後期の包含層であると考えられる。

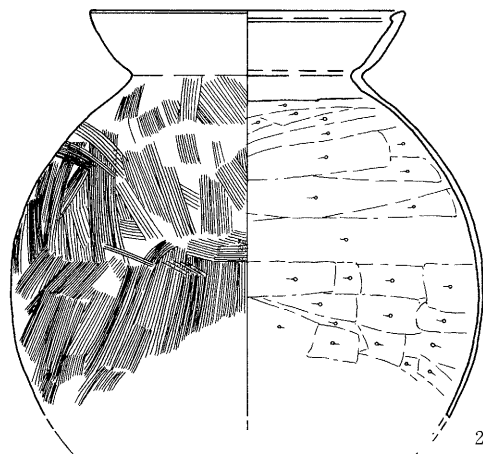
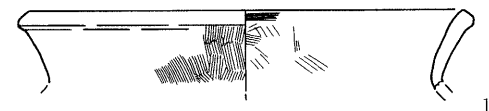
(吉田珠己)



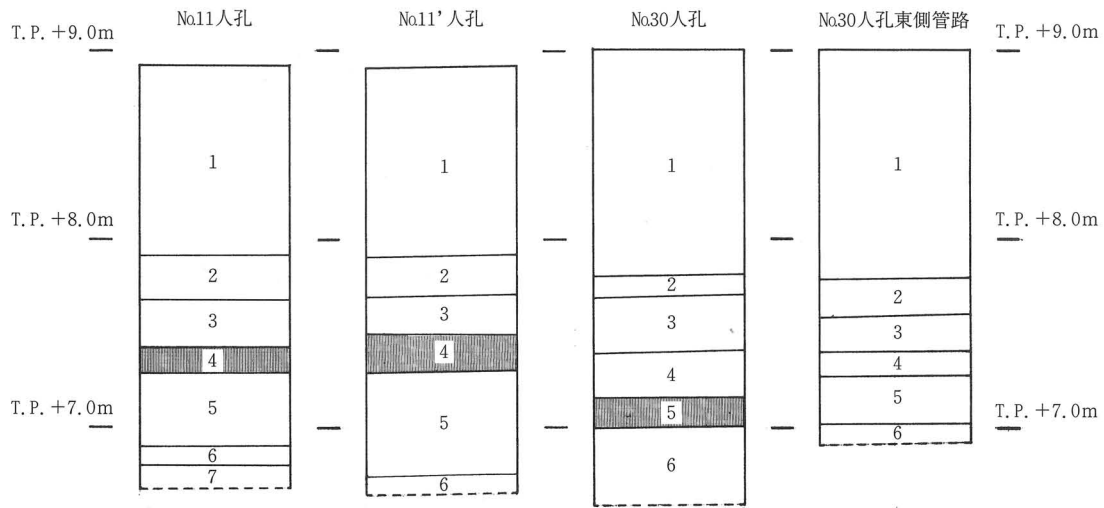
- | | |
|-------------------|---------------------|
| 1. クラッシャー | 10. 褐色斑暗灰色粘土層 |
| 2. 青灰色粘土(盛土) | 11. 褐色斑灰青色微砂質粘砂層 |
| 3-1. 灰青褐色強粘土A層 | 12. 暗灰色微砂質粘土(有機物混入) |
| 3-2. 同上B層 | 13-1. 淡灰綠色粘性微砂層 |
| 4. 灰色粘砂層? | 13-2. 淡灰綠色微砂層 |
| 5. 茶褐色微砂質粘土層 | |
| 6-1. 黄褐色粘土A層 | ※No10人孔・No12人孔とも共通 |
| 6-2. 同上B層(砂多) | |
| 7-1. 茶褐色斑灰白青色粘土A層 | |
| 7-2. 同上B層(砂混) | |
| 8. 褐灰色粘土層 | |
| 9. 褐灰色粘砂層 | |

第15図 N010人孔平面・土層図(1/40)

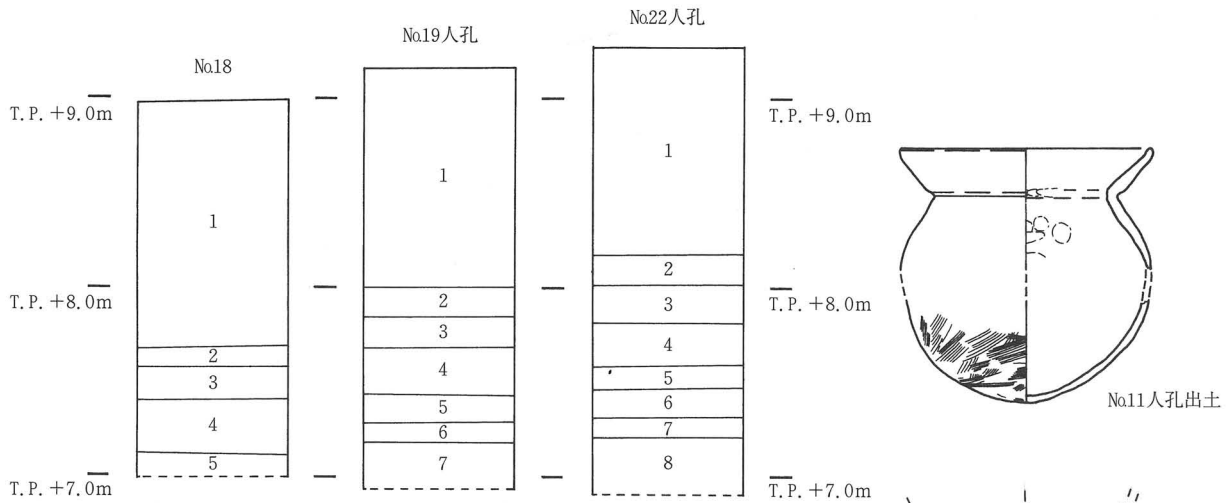
第16図 N012人孔土層図(1/40)



第17図 N010人孔出土遺物実測図(1/4)



- | | | | |
|----------------------|---------------------|------------------|----------------------|
| 1. 盛土 | 1. 盛土 | 1. 盛土 | 1. 盛土 |
| 2. 灰色(黄褐色混)砂質シルト | 2. 灰色(黄褐色混)砂質シルト | 2. 淡灰色砂質シルト | 2. 淡灰色砂質シルト |
| 3. 灰色(黄褐色混)細砂混微砂シルト | 3. 灰色(黄褐色混)細砂混微砂シルト | 3. 灰色(黄褐色混)微砂シルト | 3. 灰色(淡黄褐色混)小礫混微砂シルト |
| 4. 暗褐色細砂混シルト | 4. 暗褐色細砂混シルト | 4. 灰色粗砂 | 4. 灰色微砂質土シルト |
| 5. 暗灰色(黄灰色混)粗砂 | 5. 暗灰色粗砂 | 5. 暗灰色粗砂シルト | 5. 暗(黒)褐色シルト質粘土 |
| 6. 淡灰色粘土 | 6. 淡灰色粘土 | 6. 黄灰色シルト | 6. 暗灰色シルト |
| 7. 暗褐色粘土
(植物遺体含む) | | | |



- | | | |
|------------------|-----------------|-------------------|
| 1. 盛土 | 1. 盛土 | 1. 盛土 |
| 2. 淡黄灰色粘質シルト | 2. 灰色砂混砂質土 | 2. 暗灰色砂質土 |
| 3. 灰色(黄褐色混)微砂シルト | 3. 淡灰色微砂 | 3. 灰色(黄灰色混)微砂質土 |
| 4. 淡黄褐色微砂シルト | 4. 黄褐色砂質シルト | 4. 淡灰色(黄褐色混)微砂シルト |
| 5. 暗灰色シルト | 5. 淡灰色(黄褐色混)微砂 | 5. 黄褐色砂質シルト |
| | 6. 淡灰色(黄褐色混)シルト | 6. 淡灰色(黄褐色混)微砂 |
| | 7. 暗灰色小礫混シルト | 7. 淡灰色(黄褐色混)シルト |
| | | 8. 暗灰色小礫混シルト |

第18図 土層模式図・出土遺物実測図(1/4)

出土地	種類	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土
No10 人孔12 層	土師器	1	壺?	口縁部	23.0	4.2	口端部外面-横方向ナデ 口縁部外面-タテハケ(8本/cm) 口縁部内面-ナメハケ(4本/cm)、ユビオサエ	灰白色	やや軟	やや粗
	土師器	2	甕	口縁~体下半部	16.4	21.3	口縁部内外面-横方向ナデ 体部外面-タテハケ(8~12本/cm)のうち体部上半に横方向ナデ 体部内面-横ヘラケズリ	灰白色	普通	やや粗

出土遺物観察表

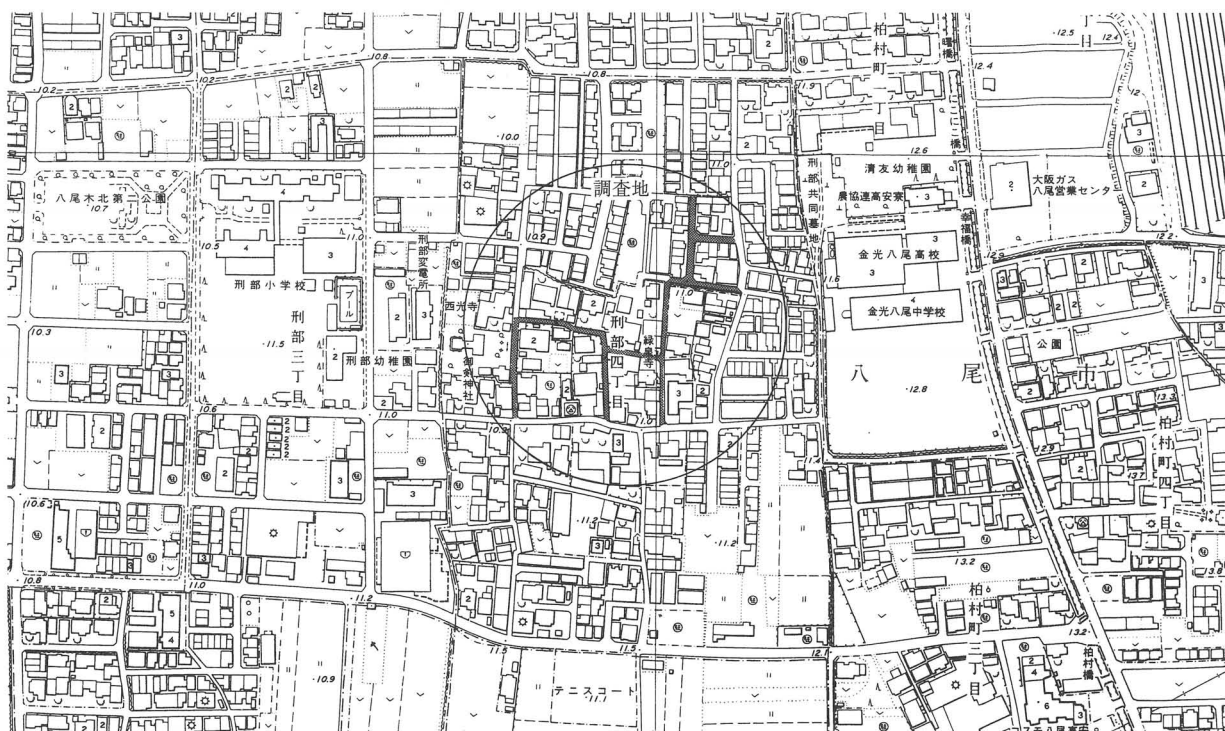
5. 中田遺跡(98-550)の調査

1. 調査地：八尾市刑部4丁目地内
2. 調査期間：平成11年3月30日～5月26日
3. 調査方法

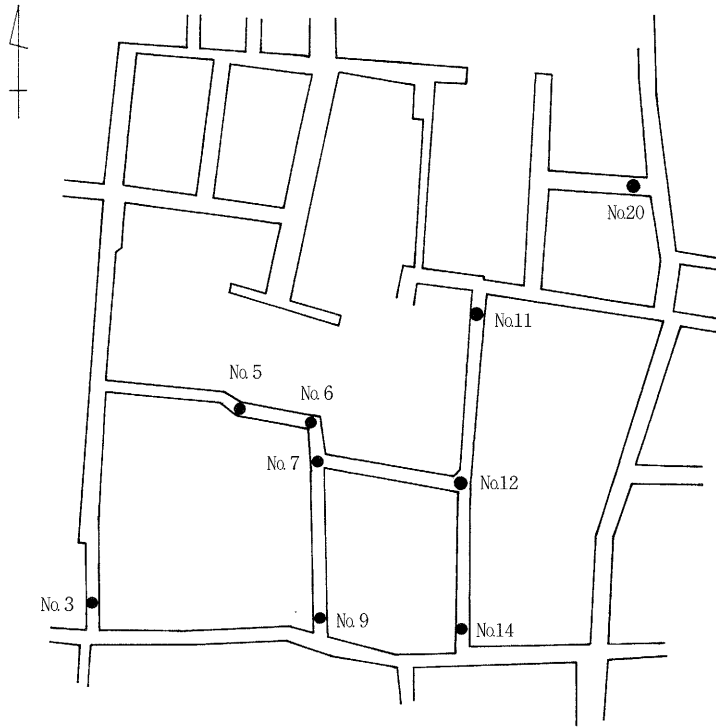
調査方法下水道管埋設に伴い、人孔設置部分の2×2mの範囲で計9か所を、機械と人力を併用して調査を行った。

4. 調査概要

[No.5人孔] 人孔部分について地表下1.9m前後まで確認した。地表下0.94～1.14mで13世紀から14世紀の遺物を含む土層を確認した。さらにこの包含層直下の地表下1.14m、TP+9.78mの茶灰褐色粘砂層上面で遺体を茶毘に付した際の土坑とみられる遺構を確認した。遺構面構成層である茶灰褐色粘砂層にも13世紀末から14世紀前半とみられる土器片が密に含まれていた。さらにこの下には厚さ0.08m程度の淡茶灰色砂質土が堆積し、その下は灰青色～灰黄色の粗砂層の堆積が続いていた。土坑はトレンチ南壁に南側の大半部分がかかる状態で検出した。南北方向を主軸とする隅丸長方形の土坑である。検出南北長1.0m、最大幅0.73mを測る。埋土は炭、火葬骨片、焼土塊よりなる層である。土坑壁面は火熱により外側は淡橙赤色の、内側は茶灰黒色の幅1～2cm程度の帯状を呈していた。また埋土内には10～30cm程度の花崗岩とみられる自然礫が置かれていた。この自然礫は熱により赤変していた。埋土内は礫の上面を含めて火葬骨片を含む炭が多量にみられ、特に底面には多くみられた。土坑の深さは10cm程度である。土坑内には14世紀前半とみられる土師器片、瓦器片が含まれていた。土師器片は土師器小皿片が多く、図化できた4点はいずれも径7～9cmの小皿である(1～4)。この他、埋土の一部を持ち帰り、篩にかけたが、副葬品とみられる遺物は確認できなかった。炭化物のなかには種子状の植物遺体が含まれており、茶毘に付した際に、藁状のものを付加したものとみられる。また土坑内北西隅の埋土上面で、径0.16m、深さ0.1mのピットを検出した。埋土は黄灰色粘砂層で、14世紀頃の時期とみられる土師器片小皿片(6)等が含まれていた。



第19図 調査地周辺図(1/5000)



第20図 調査人孔位置図(1/2000)

〔今回確認した土坑について〕

今回確認した土坑については深さ10cm程度であり、上面が包含層により、削平されている可能性が高い。また花崗岩とみられる自然礫については、火のまわりを良くするために棺の下に敷かれていたものとみられる。検出した礫の最も高いレベルが土坑切り込み面であるベース層よりも4cm程度高いことも、土坑自体の上面が削平されている可能性が高いことを示すものとみられる。

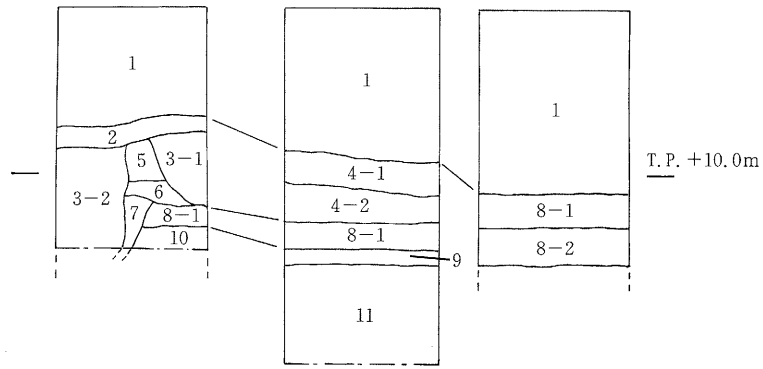
この土坑については、遺体を茶毘に付した際の遺構である可能性が高い。茶毘が行われたのち、遺骨の取り上げが行われ、改めて別の場所に埋葬が行われたものとみられる。今回確認した土坑では遺骨はある程度残存していたが、これを整理した痕跡は何えなかった。また玉類などの副葬品も調査した範囲では確認できなかったが、土坑内より出土した土師器小皿片、瓦器片は注意される。土器片の一部には火熱を受けたかとみられるものがある。茶毘に付される際に遺体に副えられたものである可能性がある。また土坑の上面で確認したピットについては、墓であることを示す樹立物の存在等も想定できるが、今回の調査では判然としなかった。

この遺構の性格については、十分な検討を行うことができなかった。類例を含め、多くのご教示を賜りたい。

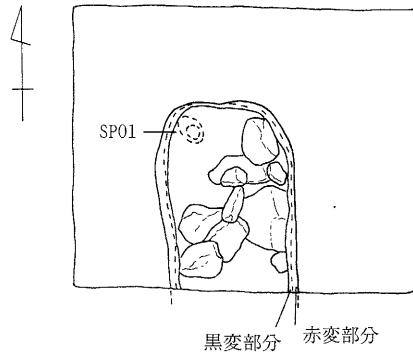
〔参考文献〕

- 小林義孝 1997・1998 「古代火葬墓の第一類型(上)(下)ー河内田辺古墓の再検討からー」『大阪文化財研究』 第13・14号 財団法人大阪府文化財調査研究センター
- 地村邦夫 1995 「大阪府における古代・中世の木棺墓について」『財団法人大阪府埋蔵文化財協会研究紀要3』 財団法人大阪府埋蔵文化財協会

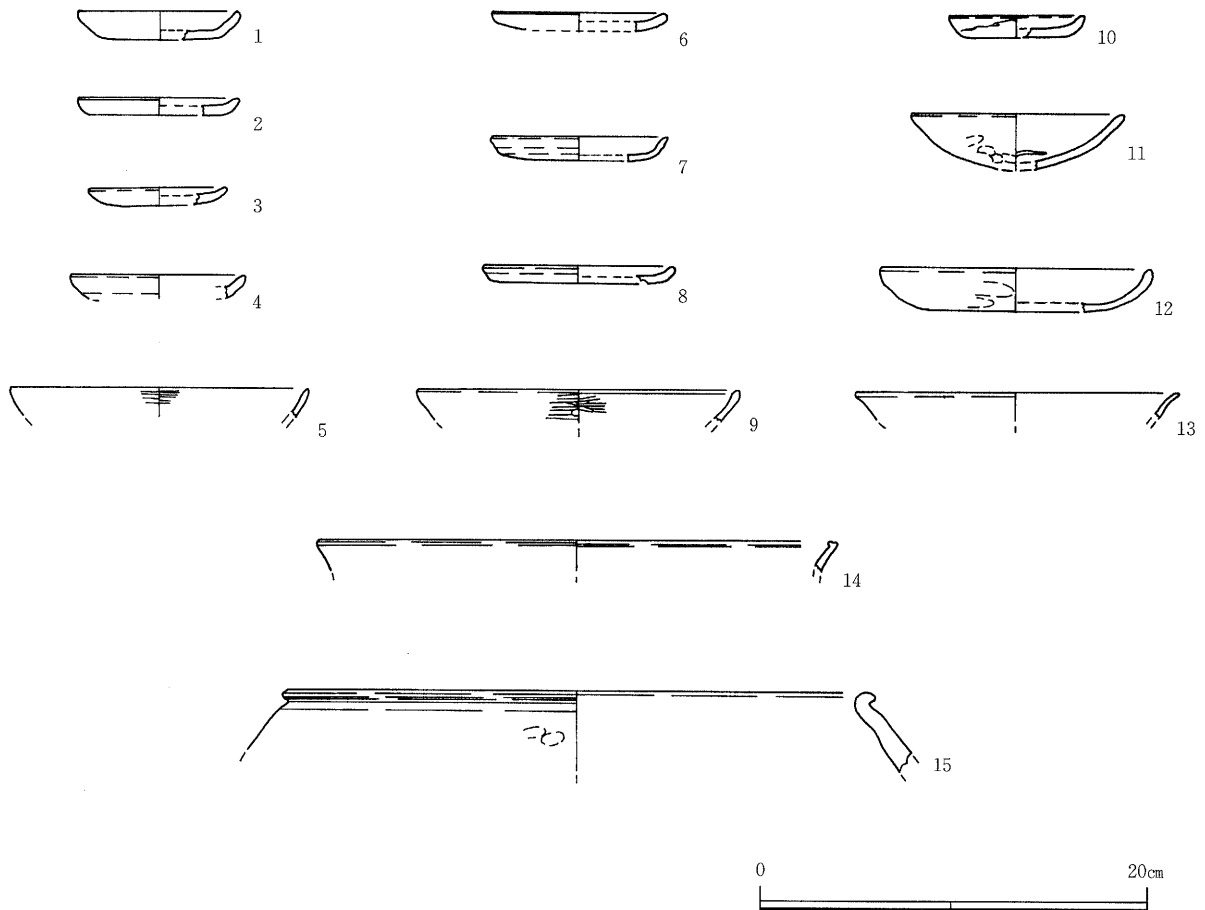
〔No.7人孔〕 地表下1.7m前後まで確認した。地表下0.4m～0.5m前後、TP+10.3m前後の淡灰茶色粘質土層を切り込み面とする近代とみられる土坑を確認した。埋土は暗灰青緑色粘砂層で近世陶磁片、棧瓦等を多く含み、中世の瓦器片等が混入していた。地表下0.95m、TP+9.5m付近で桶が据えられており、



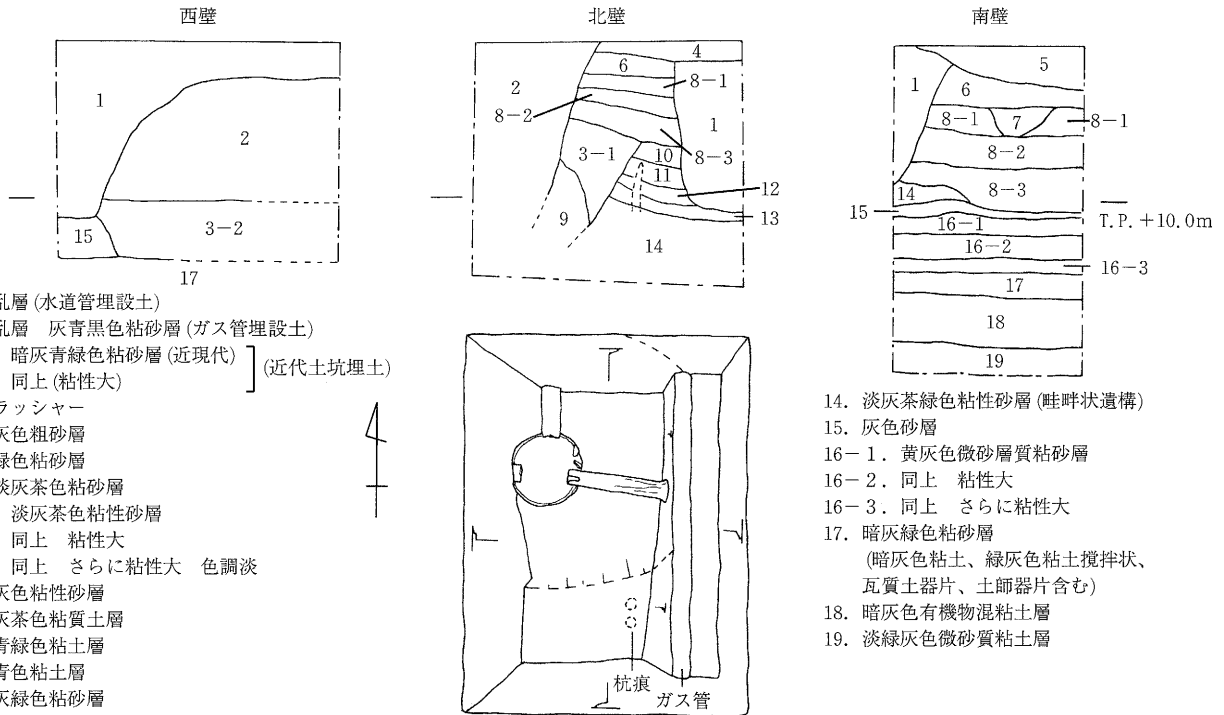
- 1. 盛土層 (現代)
- 2. 灰青色粘砂層
- 3-1. 暗灰綠色粘性砂層 (小礫混)
- 3-2. 同上 色調淡 (土師器小片少量含む)
- 4-1. 淡黄灰褐色粘砂層
- 4-2. 同上 色調暗 砂多
- 5. 淡緑灰色粘砂層
- 6. 淡緑黄灰色粘砂層 (小礫混)
- 7. 黄灰褐色粘土 (土師器片少量含む)
- 8-1. 茶灰褐色粘砂層 (中世の密な包含層)
- 8-2. 同上 砂多 (中世の密な包含層)
- 9. 淡茶灰色砂質土 (砂粗)
- 10. 淡茶灰色粘砂層
- 11. 灰青色～灰黄色粗砂層



第21図 NO 5 人孔平面土層図 (1 / 40)

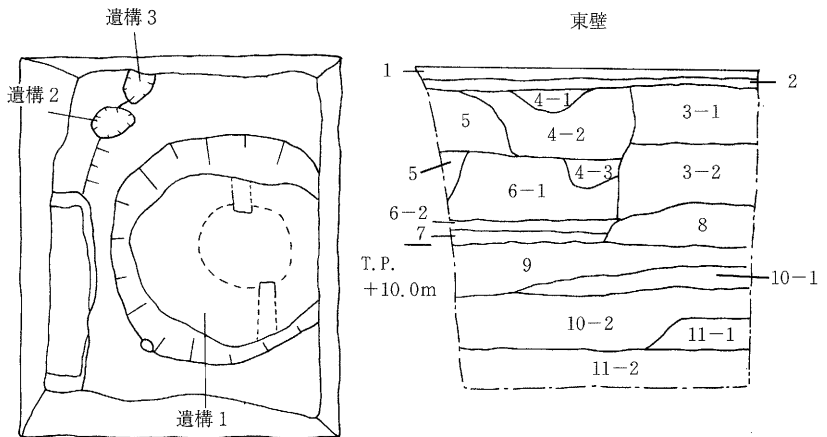


第22図 NO 5 人孔出土遺物実測図 (1 / 4)

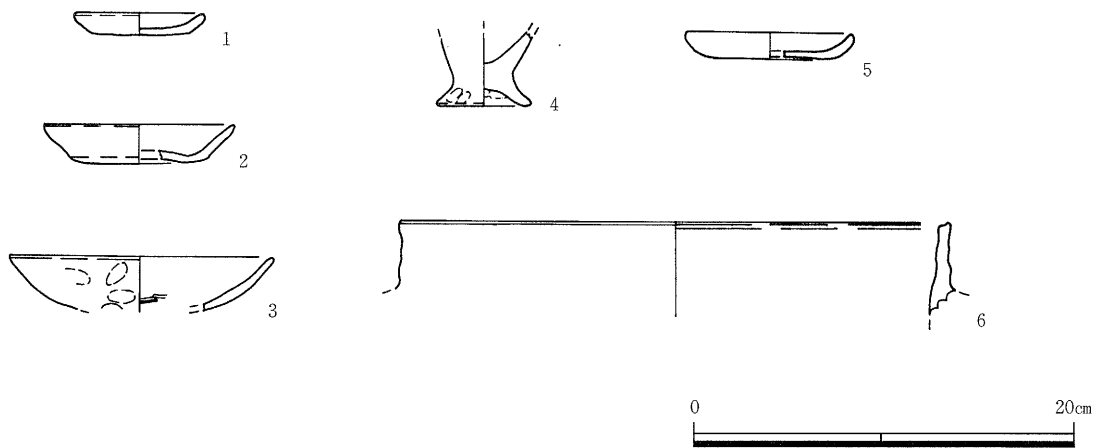


第23図 NO7人孔平面・土層図(1/40)

1. アスファルト
2. 茶灰色大礫混砂質土層
- 3-1. 灰黄茶色粘砂層
(浄化槽カクラン埋土)
- 3-2. 茶灰白色砂層
(浄化槽カクラン埋土)
- 4-1. 暗灰青色小礫混粘性砂
- 4-2. 同上 色調明
- 4-3. 同上 茶色味帯びる粘性大
5. 灰茶緑色小礫混粘性砂 (遺構1掘方埋土)
- 6-1. 灰白黄色粘性砂層
- 6-2. 同上 粘性大
7. 灰白色粗砂層
8. 灰茶色粘質土層
- 9-1. 暗灰緑色粘土層
(土師器片含む、有機物混、炭混)
- 9-2. 同上 色調暗
- 10-1. 灰色粘性砂層(有機物混)
- 10-2. 同上 粘性大(土師器片含む、炭片混)
- 11-1. 淡緑灰色粘砂層
- 11-2. 同上 ヤヤ砂多



第24図 NO12人孔平面・土層図(1/40)



第25図 NO12人孔出土遺物実測図(1/4)

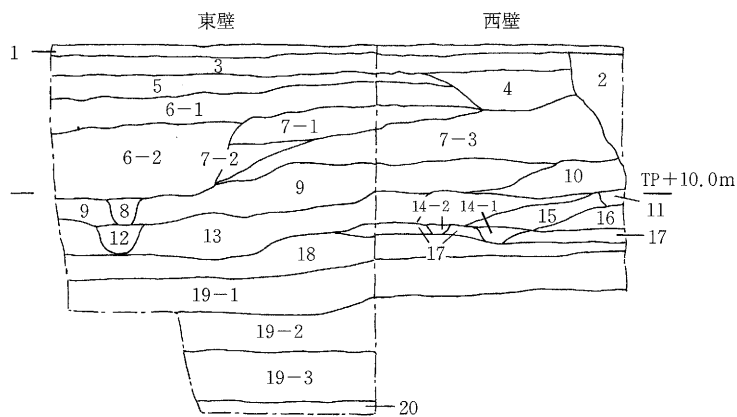
桶の底付近を削り貫いて、直径8 cm程度の陶器製の土管が北と西と東の3方向につながれていた。桶は土坑の底面を構成する土層である暗灰緑色粘砂層上に置かれている。底面の高さは地表下1.14m、TP+9.7m前後である。このことから、この土坑の深さは0.7m前後になる。さらに地表下0.8m、TP+10.0m前後の灰色砂層(15層)の上に淡灰茶緑色粘性砂層(14層)より構成される畦畔状の遺構を確認した。この畦畔状遺構の上面には径6 cm程度の木杭が2本南北方向に打ち込まれていた。時期は判然としないが、下層に15世紀代とみられる包含層があり、これ以降のものともみられる。地表下1.2~1.34mの暗灰緑色粘砂層中には15世紀頃の瓦質すり鉢片、13世紀末頃に位置付けられる土師質の羽釜片等が含まれていた。地表下0.5~0.9mの淡灰茶色粘砂層(8-2・8-3層)には瓦器片が含まれていたが、混入とみられる。

[No12人孔] 地表下1.7m前後まで確認した。地表下0.1m前後よりきりこむ近代とみられる暗渠施設に伴う井戸の掘り方を確認した。この掘り方埋土が地表下0.4m前後では円形の輪郭をなしているのが捉えられたが、切り込み面は上である。この土坑は西壁断面に一部かかった状態で検出した。最大径1.1mを測る円形の土坑である。掘り方の埋土の底には底面に据えた状態で桶が据えられており、桶の底付近を削り貫いて、直径8 cm程度の陶器製の土管が北と南と東の3方向につながれていた。桶の底の深さは地表下0.92mである。また地表下0.4m、TP+10.48mの灰白黄色粘性砂層上面で不整形のピット2基(遺構2、遺構3)を検出した。遺構2は長径0.22m、深さ0.07mを測る。埋土は茶灰色粘性砂層である。遺構3は長径0.15m、深さ0.16mを測る。埋土は茶灰色粘質土である。さらに地表下0.9~1.5m、TP+10.04~9.44mの暗灰緑色粘土層、灰色粘性砂層から土師器片が出土した。この土層は13世紀頃の溝等の埋土になるかとみられる。

[No14人孔] 地表下1.9m前後まで確認した。地表下0.75m前後、TP+10.1m前後の褐灰青色粘土層から切り込む中世の溝もしくは落ち込み状の堆積を確認した。埋土は褐色斑黒灰色粘土層で13世紀代の瓦器片、土師器片を密に含む。またこの埋土を切り込むピット状の遺構が土層断面でみられた。埋土は灰色粘砂層で遺物は確認できなかった。さらにこの下の地表下0.96~1.04m、TP+9.95~9.87mの淡灰青色粘土層から古墳時代後期の須恵器片が1点出土した。これは器台の坏部かとみられる須恵器の小片である。外面には比較的密な波状文が4帯みられる。色調は暗灰青色で焼成は良好である。この土層の直下には、地表下1.04~1.4m、TP+9.87~9.73mまで庄内式土器を密に含む淡灰緑褐色粘土層、灰緑色粘土層が堆積していた。図化した1、2は庄内式最新段階に位置付けられる土師器甕である。2点とも完形に近い状態で出土した。遺物の出土状態からこの土層は遺構の埋土と見られる。調査範囲では壁面の精査を行ったが、遺構の切り込み面を確認できなかった。以下、地表下1.9mまで灰緑色粘土層、淡灰緑茶色粘土層が続き、庄内式期とみられる遺構埋土に含まれる土層かと思われるが、遺物は確認できなかった。

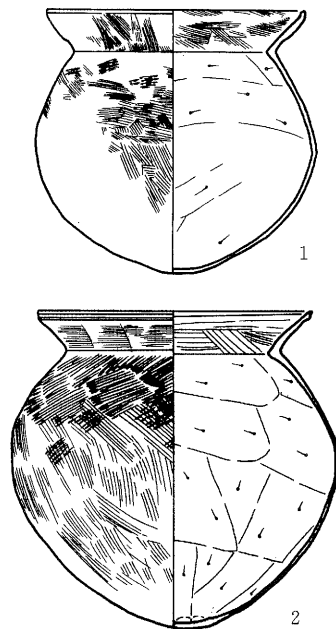
[No20人孔] 地表下2.0m前後まで確認した。地表下0.9m~1.32m前後、TP+10.8~9.68m前後の灰緑色粘性砂層、灰緑色粗砂層から14世紀代を下限とする土師器片、瓦器片、須恵器片が出土した。小片が多く摩滅したものがほとんどであり、河川もしくは河川氾濫堆積内に流入した遺物とみられる。灰緑色粘性砂層から出土した遺物のうち、実測できたものは、12~13世紀代する土師器の羽釜片(2)、14世紀後半代とみられるへそ皿片(3)、9世紀代の須恵器高台付坏片(1)である。さらに灰緑色粗砂層からは12世紀代とみられる土師器の皿片(4)、9世紀代の須恵器の高台付坏片(5)、14世紀代かとみられる土師器の羽釜片(6)が出土した。9世紀代の須恵器高台付坏については明らかに混入とみられる遺物であるが、付近に当該期の包含層の存在することを示すものであり注意される。さらにこの下の地表下1.48~1.62mの褐色斑灰色強粘土層からは須恵器、土師器の小片が、地表下1.74~1.94mの灰緑色砂混粘土層からは土師器の小片が若干量出土した。いずれも中世頃のものともみられる。これらの土層では遺構は確認できず、性格は判然としない。

[No3人孔] 地表下2.0m前後まで確認した。地表下1.05m~1.36m、TP+9.68~9.4mの暗灰青色粘土層で中世とみられる土師器片が出土した。さらに地表下1.36~1.9m、TP+9.36~8.85mの暗灰緑色強

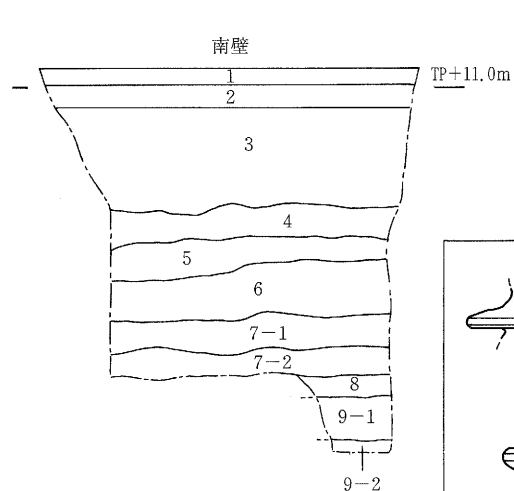


- | | |
|--------------------|--------------------------|
| 1. アスファルト | 11. 淡灰綠色砂層 |
| 2. 攪乱層 | 12. 淡灰色粘砂層 |
| 3. クラッシャー | 13. 褐色斑黒灰色粘土層 (炭多、中世包含層) |
| 4. 暗灰色粘砂層 | 14-1. 褐灰青色粘土層 |
| 5. 茶灰綠色砂質土層 | 14-2. 同上 粘性大 |
| 6-1. 灰緑茶色粘性砂層 | 15. 淡灰青色粘土層 |
| 6-2. 同上 粘性大 砂ブロック混 | 16. 暗灰青色粘土層 |
| 7-1. 茶灰白色粘性砂層 | 17. 淡灰青色粘土層 (須恵器片含む) |
| 7-2. 同上 砂多 | 18. 淡灰緑褐色粘土層 (庄内式土器包含層) |
| 7-2. 同上 粗砂ブロック | 19-1. 灰緑色粘土層 (庄内式土器包含層) |
| 8. 淡灰青色粘砂層 | 19-2. 同上 粘性大 (有機物混) |
| 9. 淡灰茶色砂層 | 20. 淡灰茶緑色粘土層 |
| 10. 褐黄茶色粘砂層 | |

第26図 N014人孔土層断面図 (1 / 40)

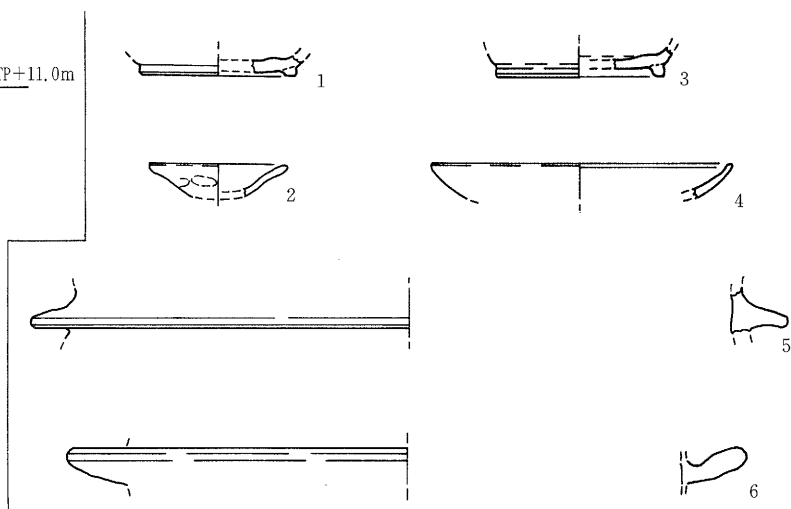


第27図 N014人孔出土遺物実測図 (1 / 4)

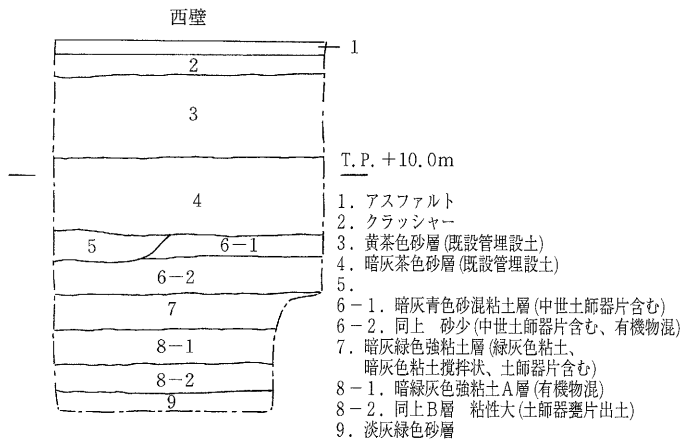


- | |
|-------------------------------|
| 1. アスファルト |
| 2. クラッシャー |
| 3. 真砂土層 (既設管埋土) |
| 4. 暗灰色粘性砂質土層 (耕作土層) |
| 5. 灰緑色粘性砂層 (中世土器片密に含む) |
| 6. 灰緑色粗砂層 (中世土器片や含むラミナ状3-4cm) |
| 6-2. 同上 粘性大 ブロック混 |
| 7-1. 褐色斑灰色粘土層 (Fe斑) |
| 7-2. 同上 砂多 (土師器片少量含む、白色斑) |
| 7-2. 同上 粗砂ブロック |
| 8. 灰色粘性砂層 (有機物混) |
| 9-1. 灰緑色砂混粘土層 (土師器片少量含む) |
| 9-2. 同上 粘性大 |

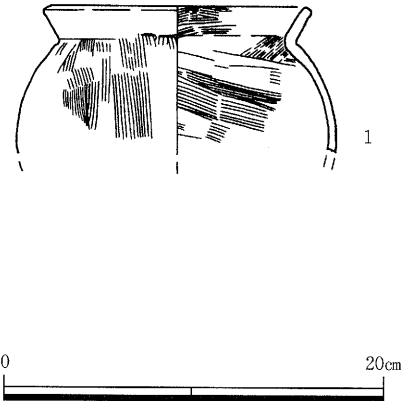
第28図 N020人孔土層断面図 (1 / 40)



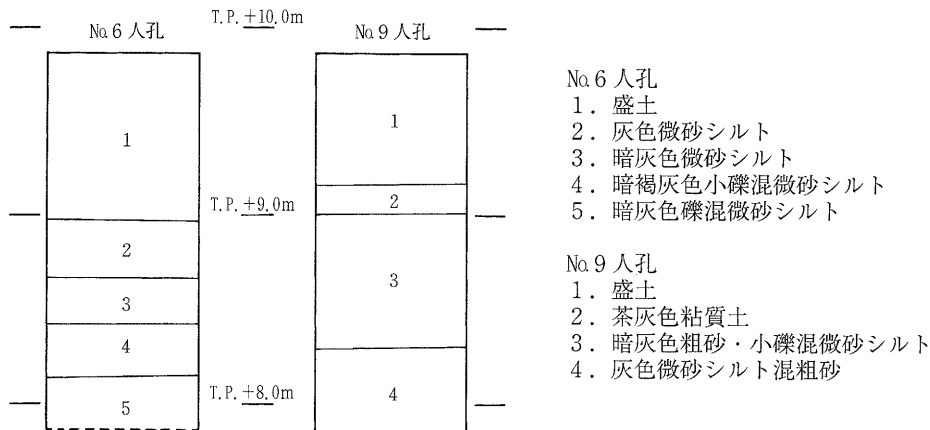
第29図 N020人孔出土遺物実測図 (1 / 4)



第30図 NO 3 人孔土層断面図(1/40)



第31図 NO 3 人孔出土遺物実測図



第32図 土層模式図(1/40)

粘土層、暗緑灰色強粘土B層で古墳時代の土師器片が出土した。特に地表下1.74~1.9mの暗緑灰色強粘土B層からは古墳時代中期後半頃の土師器の甕(第31図)が1点出土した。甕内部には炭が多く含まれていた。(吉田野乃)

[No.6 人孔] 地表下1.2~1.45m (T.P. +9.4~9.65m) の暗灰色微砂シルト層から瓦・土師器片が出土しており、鎌倉時代頃の包含層と考えられる。またこのシルト層以下地表下2.0m (T.P. +8.85m) 前後まで水分を多く含む小礫混じりの微砂シルト層が続き、溝等の遺構の埋土の可能性もあるが、肩部は確認できなかった。

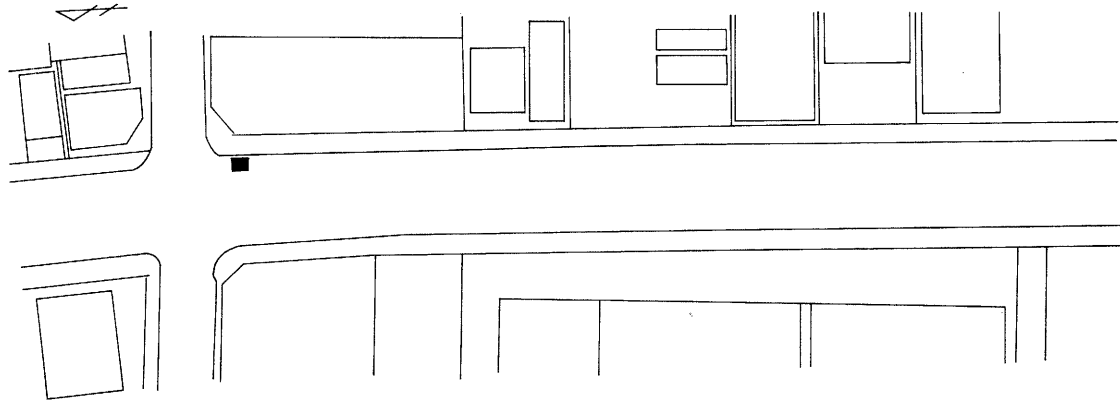
[No.9 人孔] 地表下0.85~1.55m (T.P. +9.3~10.0m) の暗灰色微砂シルト層から土師器片が出土している。また地表下1.55m (T.P. +9.3m) 以下は灰色微砂シルト混じりの粗砂層となり、No.6 人孔部分でみられた溝等の遺構の続きである可能性もある。(吉田珠己)

出土地	種類	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土
No5人孔 火葬墓埋土 内	土師器	1	皿	口縁～底部一部	8.2	0.9	口縁部外面～内部～横方向ナデ 底部外面～不定方向ナデ	黄灰色	やや軟	やや良
		2	皿	口縁～底部一部	8.2	0.9	内外面～横方向ナデ	暗黄橙色	やや硬	やや良
		3	皿	口縁～底部一部	7.0	0.9	外面～不定方向ナデ 内面～横方向ナデ	暗黄橙色	やや軟	やや粗
		4	皿	口縁部	9.0	1.2	内外面～横方向ナデ	淡黄橙色	硬	良
	瓦器	5	椀	口縁部	15.6	1.3	内外面～横ヘラミガキ	灰色	やや硬	ly
No5人孔 ビット埋土 内	土師器	6	皿	口縁～底部一部	11.0	1.2	内外面～横方向ナデ	暗橙色	やや軟	普通
No5人孔 8-1層	土師器	7	皿	口縁～底部一部	9.2	1.2	口縁部外面～内面～横方向ナデ 底部外面～不定方向ナデ 内面～摩滅により不明	暗黄橙色	軟	やや良
		8	皿	口縁～底部一部	9.8	0.8	内外面～横方向ナデ	暗黄橙色	軟	やや良
	瓦器	9	椀	口縁部	14.6	1.6	内外面～横ヘラミガキ	灰色	硬	精良
	土師器	10	皿	口縁～底部一部	7.0	1.2	口縁部内外面～横方向ナデ	暗黄橙色	やや軟	やや粗
	瓦器	11	椀	口縁～底部一部	11.0	2.9	口縁部外面～内面～横方向ナデ 体～底部外面～ユビオサエのち 不定方向ナデ 底部内面～横方向ヘラミガキ	灰色	やや硬	良
	土師器	12	皿	口縁～底部一部	14.0	2.2	口縁部内外面～横方向ナデ 底部内外面～不定方向ナデ	暗橙色	やや軟	やや良
	土師器	13	椀	口縁部	17.0	1.4	内外面～横方向ナデ	灰白色	やや硬	良
	土師質土器	14	鍋か	口縁部	27.1	1.8	内外面～横方向ナデ	橙色	普通	やや良
	土師器	15	羽釜	口縁～肩部	30.0	4.2	内外面～横方向ナデ 肩部外面～ユビオサエ 肩部内面～ナナメ方向ナデ	淡黄橙色	硬	やや粗
No12人孔 遺構1掘り 方埋土混入	土師器	1	皿	口縁～底部	6.6	1.2	口縁部外面～内面～横方向ナデ 底部内外面～不定方向ナデ	淡黄色	やや硬	良
		2	皿	口縁～底部一部	10.0	2.0	口縁部外面～内面～横方向ナデ 底部内外面～不定方向ナデ	暗黄橙色	やや硬	良
	瓦器	3	椀	口縁～底部一部	13.8	2.8	外面～ユビオサエ、ナデ 口縁部外面～内面～横方向ナデ 底部内面～ヘラミガキ	灰色	やや軟	良
No12人孔9 層	土師器	4	不明	脚部	(底径) 4.7	3.9	脚部外面～板オサエのち不定方 向ナデ 内面～縦方向ナデ 底部外面～横方向ナデ	暗橙色	やや軟	良
		5	皿	口縁～底部一部	8.6	1.4	口縁部外面～内面～横方向ナデ 底部外面～不定方向ナデ	暗黄橙色	やや軟	良
No12人孔 遺構1掘り 方埋土混入	土師質土器	6	羽釜	口縁部	28.9	4.9	口縁部外面～横方向ナデ 内面～ヨコハケのち横方向ナデ	灰黄褐色	やや軟	良

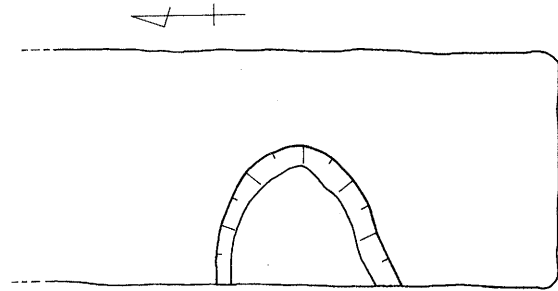
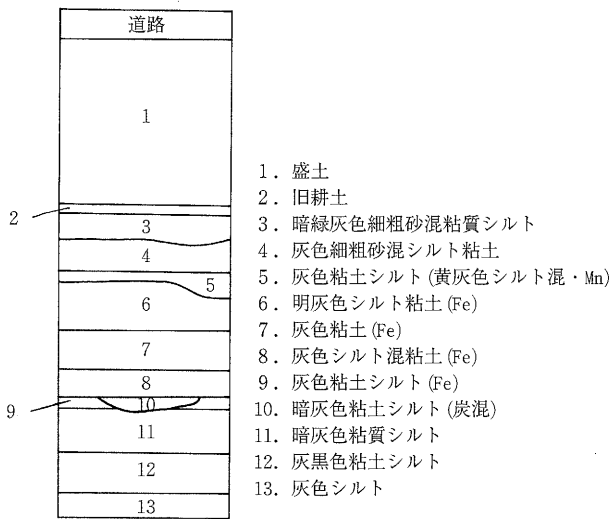
出土遺物観察表 1

出土地	種類	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土・備考
No14人孔 18・19層	土師器	1	甕	口縁～底部	13.4	(器高) 13.9	体部外面～タタキのちハケメ (10本/cm) 口縁部外面～タテハケのち横方向ナデ 口縁部内面～ヨコハケのち横方向ナデ 体部 上半内面～横方向ヘラケズリ 体部下半内面～縦方向ヘラケズリ 底部内面～ユビオサエ	灰黄褐色	やや軟	良 (外面にスス付着)
	土師器	2	甕	口縁～底部	14.4	(器高) 16.8	体部外面～タタキのちタテハケ (7本/cm) 口縁部外面～ヨコハケのち横方向ナデ 口縁部内面～ヨコ～ナナメハケのち横方向ナデ 体部上半内面～横方向ヘラケズリ 体部下半内面～縦方向ヘラケズリ 底部内面～ユビオサエ	暗黄褐色	普通	良 (体部外面、底部内面スス付着)
No20人孔 5層			杯B	底部						
	須恵器	1	羽釜	鑊部	(高台径) 8.0	1.0	底部内面～高台部外面～ロクロナデ 底部外面～不定方向ナデ	灰色	やや硬	良
No20人孔 6層	土師器	2	皿	口縁～体部	(鑊径) 39	2.5	内外面～横方向ナデ	赤灰色	やや軟	粗
		3	皿	口縁～体部	7.0	1.7	体部面～ユビオサエ	淡黄色	軟	良
		4	杯B	底部～体部一部	19.6	1.8	摩滅により不明	淡黄色	軟	やや粗
	須恵器	5	羽釜	鑊部	(高台径) 8.6	1.5	高台部外面～体部内面～ロクロナデ 底部内面～不定方向ナデ 底部外面～ロクロヘラケズリ	淡灰色	やや軟	良
No3人孔 第5層	土師器	6	蓋	口縁～体部	(鑊径) 35	1.9	鑊部上面ヨコハケのち横方向ナデ、一部不定方向ナデ	暗褐色	やや硬	非常に粗
	土師器				13.4	7.7	口縁分外面～横方向ナデ 体部外面～タテハケ(8本/cm) 口縁部内面～体部内面～ヨコハケ(10本/cm)	灰黄色	軟	粗

出土遺物観察表 2

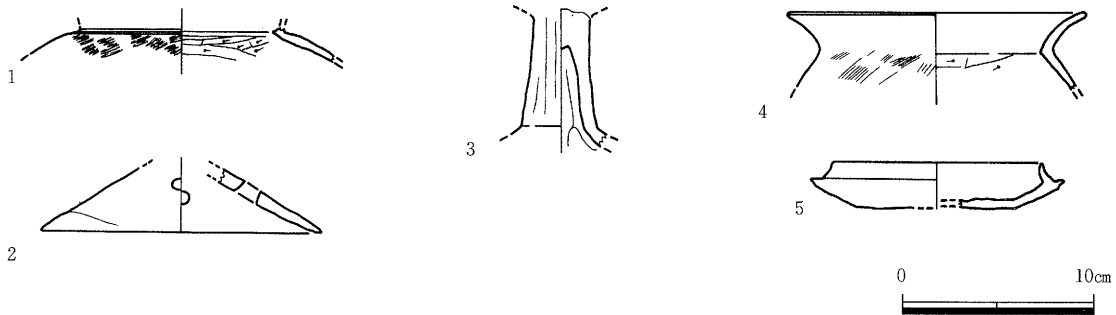


第34図 調査位置図(1/1000)



第36図 土坑平面図(1/40)

第35図 基本層序模式図(1/40)



第37図 出土遺物実測図(1/4)

7. 東弓削遺跡(98-246)の調査

1. 調査地 八尾市八尾木4丁目地内
2. 調査期間 平成11年1月21日(遺構確認調査)
平成11年1月26日～28日(立会調査)
3. 調査方法

八尾市下水道部河川課による水路改修に伴い、北と南に1m四方の調査区2箇所を設定し、遺構確認調査を行ったところ、現況水路地表面から0.15m下で瓦器片、土師器片を含む包含層を確認したため、水路改修工事に併行して、立会調査を行った。

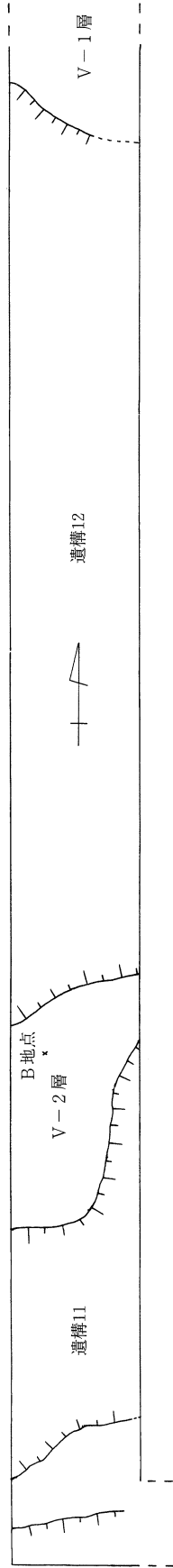
4. 調査概要

〔遺構確認調査〕南側調査区では現況地盤は現況水路の地表面より0.1m高い。地表下0.6mまで確認したところ、地表下0.28m～0.6mで瓦器片、土師器片を含む灰褐色粘砂層、灰褐色粘性砂層を確認した。北側調査区では現況地盤は現況水路地表面より0.22m高い。地表下0.8mまで確認したところ、地表下0.3～0.76mで土師器片を含む黄灰褐色粘砂層、黄褐色粘質土層を確認した。

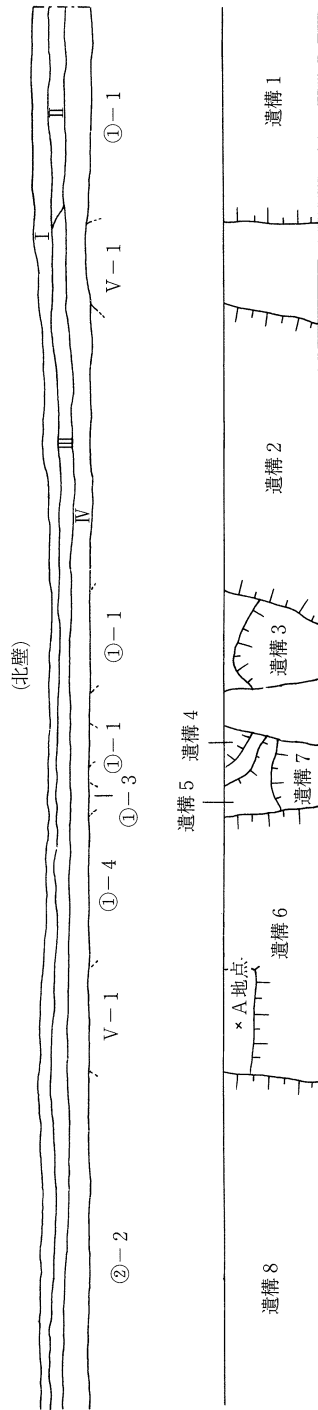
〔立会調査〕水路改修工事の南北60.27m、東西23.06mの施工区間が調査対象であったが、諸々の事情から南北施工区間については南から18m分しか調査できなかった。工事の掘削深度は最大で0.6m前後である。土層断面及び遺構検出状況平面の略測図を作成し、出土遺物の取り上げを行った。耕作土層である茶灰青色粘砂層(I層)の下には、灰黄茶色粘性砂質土層(III層)及び東西区東端に、灰色粘砂層(II層)が堆積する。この下には中世とみられる白磁片、須恵器片を含む灰黄茶色粘砂層が堆積する。この直下、地表下0.5～0.6m前後、TP+10.0m前後の黄灰褐色粘砂層(V-1層)上面が遺構検出面である。工事掘削の深さはちょうど遺構面直上付近で留まっていたため、遺構検出状況での略測及び遺物取り上げを行った。検出遺構は表のとおりである。13基の遺構を検出したが、幅1mの調査区であることもあり、全体の形状・性格が明確に判断できるものはなかった。このため遺構名については、検出順に「遺構1、遺構2…」と称している。



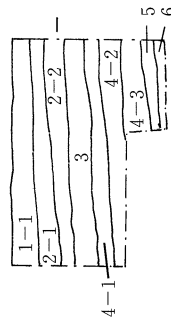
南北区



東西区

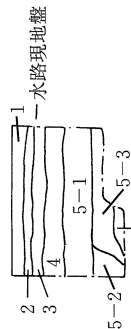


北側調査区



- 1-1. 耕作土層
- 1-2. 同上(明茶灰色砂)
- 2-1. 灰青茶色粘性砂質土層
- 2-2. 同上 砂多
- 3. 茶灰色砂質土層
- 4-1. 黄褐色粘性砂層
- 4-2. 同上 粘性大
- 4-3. 同上 粘性大(Fe少)
- 5. 黄褐色粘質土層
- 6. 褐色斑灰色粘質土層

南側調査区



- 1. 耕作土層
- 2. 明茶灰色砂層
- 3. 灰青茶色粘性砂質土層
- 4. 淡明灰褐色粘砂層
- 5-1. 灰褐色粘性大
- 5-2. 同上 粘性大
- 5-3. 同上 色調暗
- 6. 灰褐色粘性砂層

I 層 茶灰青色粘砂層(耕作土層)

- II 層 灰青茶色粘性砂質土層
- III 層 灰黄茶色粘砂層(平安~中世土器包含層)
- IV 層 灰黄茶色粘砂層(遺構面構成層、平安時代土器包含層)
- V-1 層 黄灰褐色粘砂層(遺構面構成層、平安~中世土器包含層)
- V-2 層 同上 色調暗、茶色味帯びる

遺構埋土

- ①-1 茶灰褐色砂混粘砂(炭混)
- ①-2 同上 色調暗 粘性大
- ①-3 同上 粘性大 灰色粘土多
- ①-4 同上 色調灰白色味濃い、粘性大
- ①-5 同上 色調暗?
- ②-1 灰茶黄褐色粘質土(炭混)
- ②-2 同上 色調暗
- ③ 茶灰青褐色粘砂
- ④ 暗茶灰色粘砂層
- ⑤ 茶黄灰褐色粘砂層

第39図 調査区土層断面図(1/40)

遺構1からは9世紀代とみられる須恵器壺(3)をはじめとする須恵器・土師器片、製塩土器片が出土している。遺構6は東西区の東端から10~11mの地点でL字状に屈折する部分を検出しており、東西幅2.7mを測ることから、屋敷地等を区画する大溝等になる可能性もある。遺構6は8世紀後半から9世紀初頭とみられる須恵器(5、6)が出土しているが、瓦器小片が含まれている。遺構8からは7世紀代とみられる土師器高杯(7)をはじめとする土師器片、須恵器片、12世紀末頃かとみられる瓦器片の他に、砂岩製とみられる砥石片(8)が出土した。遺構9も検出状況からは溝になる可能性のある遺構である。遺構9からは9世紀末から10世紀にかけてのものとしてみられる土師器皿(9)や、7世紀頃のものかともみられる土師器高杯(10)をはじめ、須恵器、製塩土器が出土しているが、瓦器少片が含まれている。遺構12からは9世紀代とみられる須恵器壺(12)、須恵器杯B(13)をはじめとする須恵器片、土師器片、製塩土器片が出土した。遺構12については自然地形の落ち込みである可能性がある。

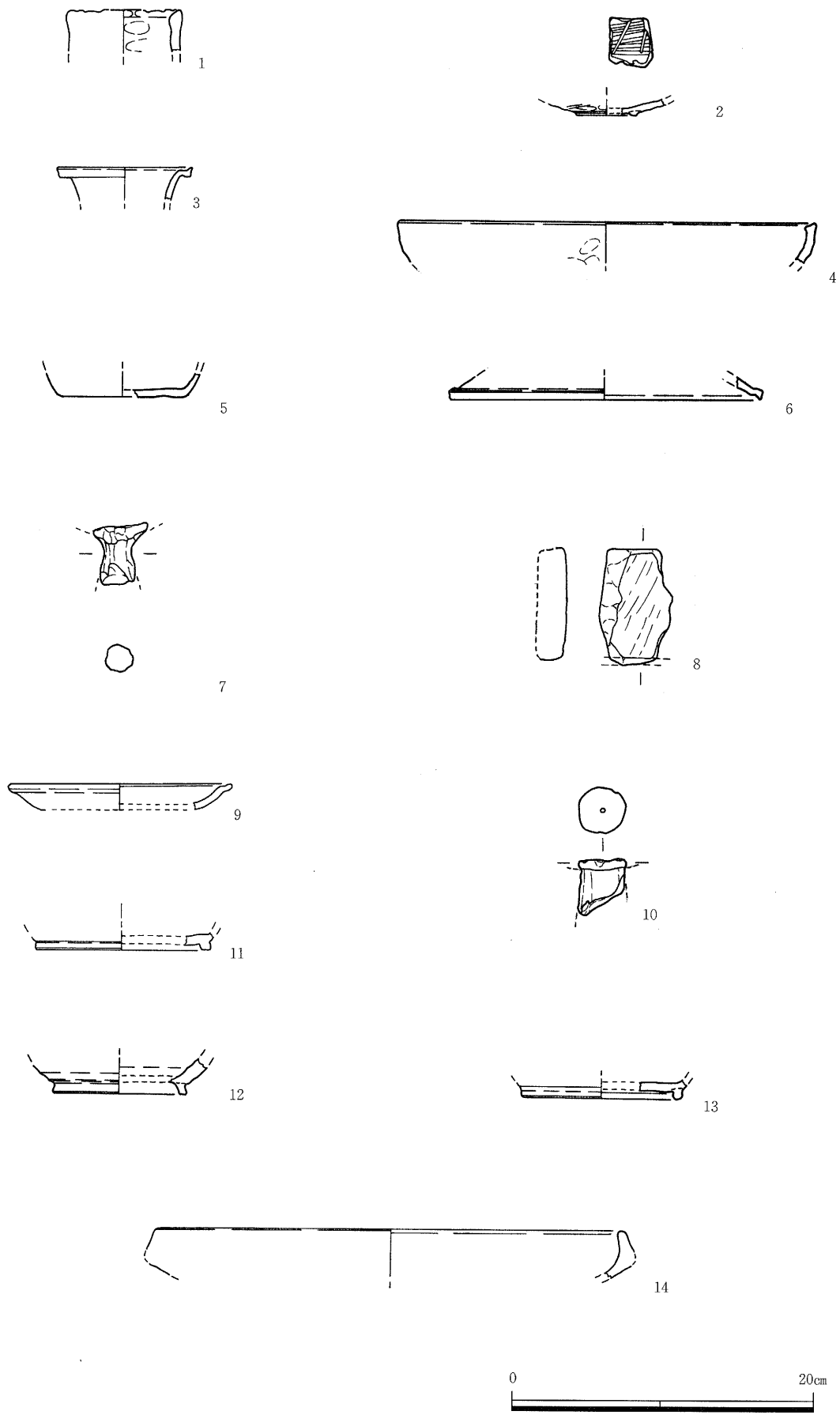
当調査地の南側隣接地では平安時代前~中期の遺構・包含層を確認しており(平成6年度市調査)、寺院・官衙等の存在が予想されている。今回の調査で確認した遺構・包含層には平安時代前~中期の土器片が含まれていたが、すべて鎌倉時代頃とみられる遺構・包含層であった。平安時代の遺構面が削平されて、鎌倉時代の遺構面が形成された可能性がある。ただ遺物の出土状態からは近接して平安時代の遺構の存在する可能性があり、注意される。(吉田野乃)

出土地	種類	番号	器種	部位	径(cm)	現高(cm)	調整・手法	色調	焼成	胎土	備考
南側調査区 灰褐色粘砂層	製塩土器	1	製塩土器	口縁~体部	7.2	2.8	外面-摩滅により不明 内面-ユビオサエ	橙色	硬	良	
南側調査区	瓦器	2	腕	底部	(高台径) 3.6	1.1	外面-高台貼り付けに伴うユビオサエ、ナデ 内面-平行ヘラミガキ	灰色	硬	良	
東西区遺構1	須恵器	3	壺	口縁~	(口径) 9.0	2.2	内外面-ロクロナデ	灰白色	硬	良	内外面灰 釉付着
	土師器	4	鍋?	口縁~体上半部	27.6	2.7	口縁部内外面-横方向ナデ 体上半部外面-ユビオサエ	暗橙色	やや硬	やや粗	
東西区遺構6	須恵器	5	杯	底部	(底径) 8.1	1.7	底部外面-ヘラケズリのちナデ	灰白色	軟	やや粗	
		6	杯B蓋	口縁部	20.6	1.5	内外面-ロクロナデ	灰色	硬	良	
東西区遺構8	土師器	7	高杯	脚部		4.1	外面-ヘラケズリ 内面-ナデ	暗黄橙色	硬	良	内面に自然 釉付着
		8	砥石	口縁~体部	(最大長) 7.7cm		片面にナメ方向の使用痕あり	淡灰色			砂岩製か
東西区遺構9	土師器	9	皿	脚部	14.6	1.7	内外面-ナデ	暗赤褐色	硬	良	
		10	高杯	底部		3.7	外面-摩滅により不明 内面-シボリメ	橙色	硬	良	
東西区V層	須恵器	11	杯B	底部	(高台径) 11.6	1.2	内外面-ロクロナデ	灰色	硬	良	
南北区遺構12	須恵器	12	壺	底部	9.0	2.4	内外面-ロクロナデ	灰白色	硬	良	
		13	杯B	口縁~	(高台径) 10.2	1.3	内外面-ロクロナデ	灰色			
南北区V-3層	土師器	14	炮烙	口縁~体上半部	30.6	3.1	口縁部外面-横方向ナデ 体上半部外面-不定方向ナデ	暗橙色	硬	良	

出土遺物観察表

遺構名	検出地区	遺構の大きさ	遺構埋土(図層名-覧番号)	出土遺物	備考
遺構1	東西地区	東西最大幅3.1m	①-1層	土師器・須恵器・製塩土器	
遺構2	東西地区	東西2.3m以上	①-1層	土師器・製塩土器	
遺構3	東西地区	南北0.9m以上	①-3層	なし	
遺構4	東西地区	南北0.4m以上	①-1層	なし	
遺構5	東西地区	南北0.5m以上	①-3層	なし	
遺構6	東西地区	東西幅2.7m	①-4層	瓦器・土師器・須恵器・製塩土器	大溝か
遺構7	東西地区	南北0.5m以上	②-1層	土師器	
遺構8	東西地区	東西4.6m以上	②-2層	瓦器・土師器・須恵器・砥石	
遺構9	東西地区	東西7m以上	③層	瓦器・土師器・須恵器・製塩土器	溝か
遺構10	東西地区	東西3m以上	⑤層	土師器・須恵器	
遺構11	南北地区	南北幅3.0m東西幅	①-5層	瓦器・土師器・須恵器・製塩土器	
遺構12	南北地区	11.2m	④層	土師器・須恵器・製塩土器	落ち込み?

遺構一覧表



第40図 出土遺物実測図(1 / 4)

版 图

図版 1 心合寺山古墳 (新池・平成10年度の調査)



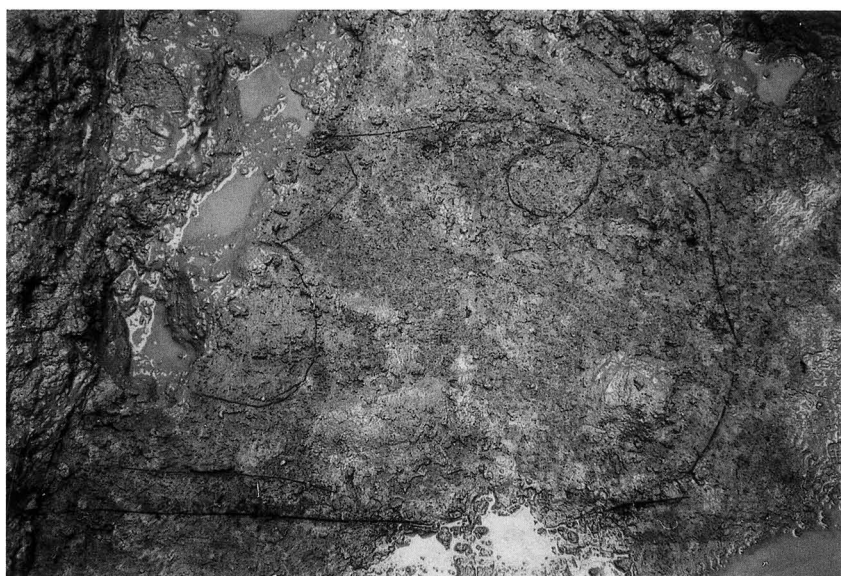
調査地(西より)



調査地(開削部付近東より)



調査地(西法面南より)



NO 5 人孔一土坑検出状況 (東より)

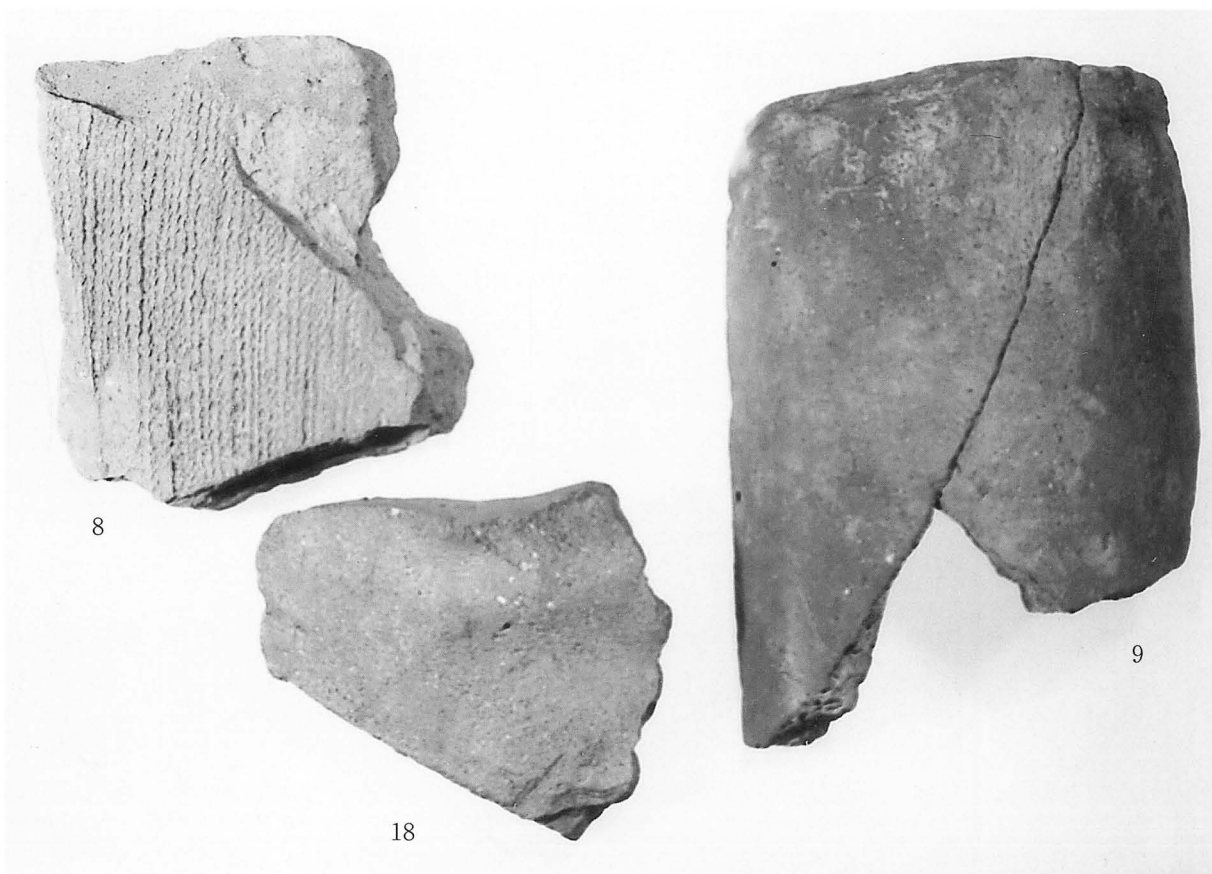
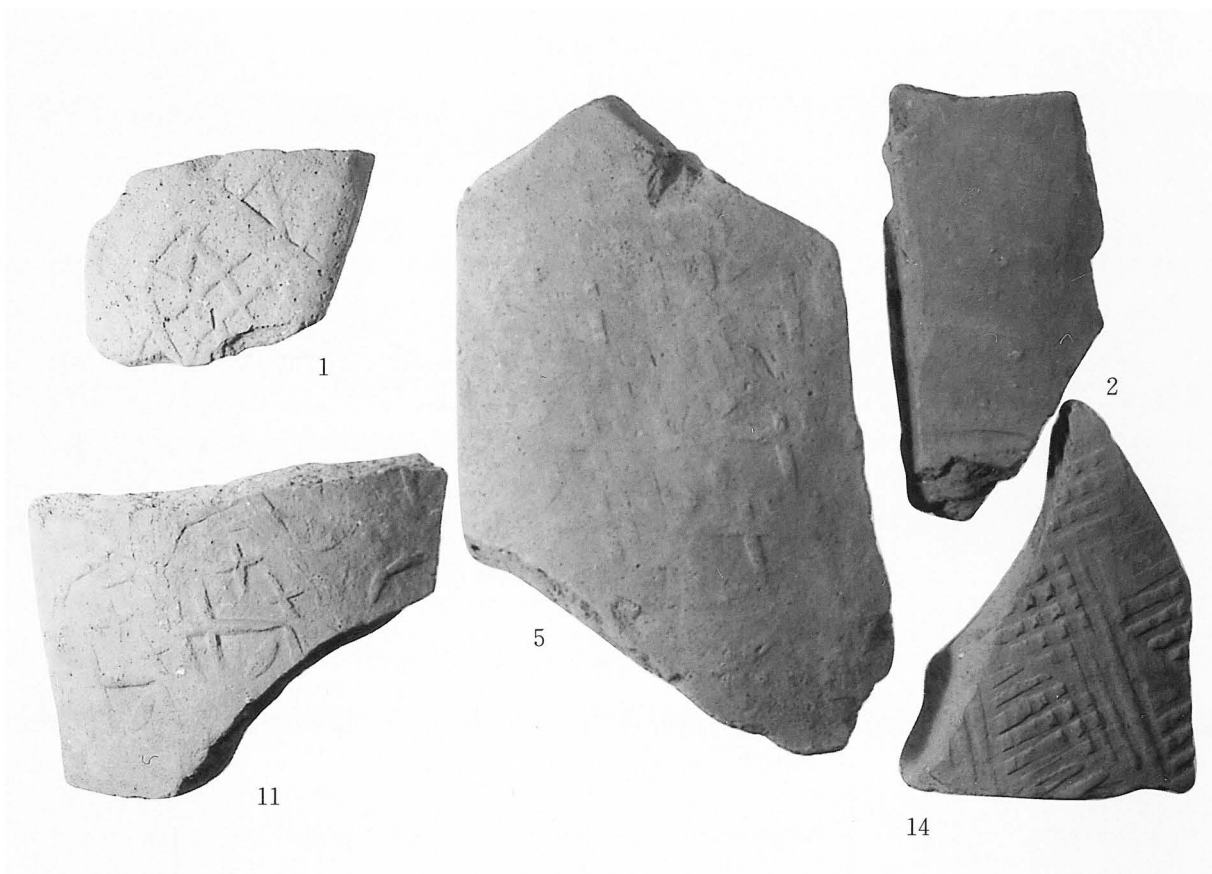


NO 5 人孔一土坑 (西より)



NO 5 人孔一土坑 (東より)

図版 3 心合山寺山古墳(新池・平成10年度)出土遺物





98-550 NO 5 人孔 土坑内

報 告 書 抄 録

ふりがな	やおしないいせきへいせい11ねんどはつくつちようさほうこくしょⅡ
書 名	八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅱ
副 書 名	平成11年度公共事業
巻 次	
シリーズ名	八尾市文化財調査報告
シリーズ番号	43
編 著 者 名	米田敏幸・濱斎・吉田野乃・吉田珠己・藤井淳弘
編 集 機 関	八尾市教育委員会
所 在 地	〒581-0003 大阪府八尾市本町1丁目1番1号 ☎0729-91-3881
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 線 ° ' "	東 径 ° ' "	調 査 期 間	調 査 面 積 (m ²)	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡	やおし市 きゅうほうじ 八尾市 久宝寺	27212		34° 37' 29"	135° 35' 16"	990216 0305・8・9・18	10	公共下水道工事に伴う遺構確認調査
しおんじやまこかん 心合寺山古墳	やおし市 おおなげ 八尾市 大竹	27212		34° 38' 11"	135° 38' 34"	990204・22	90	堤体改修に伴う立会調査
しおんじやまこかん 心合寺山古墳	やおし市 おおなげ 八尾市 大竹	27212		34° 38' 11"	135° 38' 34"	990301・10・19	30	現状変更に伴う立会調査
あとべいせき 跡部遺跡	やおし市 たいしどう 八尾市 太子堂	27212		34° 36' 45"	135° 35' 26"	990701・2・6・7 0930 1005	35	公共下水道工事に伴う遺構確認調査
なかたせき 中田遺跡	やおし市 おおなべ 八尾市 刑部	27212		34° 36' 36"	135° 37' 24"	0990330 0402・5・9・12 0506・7・14・26	36	公共下水道工事に伴う遺構確認調査
なかたせき 中田遺跡	やおし市 やおぎきた 八尾市 八尾木北	27212		34° 36' 48"	135° 36' 48"	990624	1.6	公共下水道工事に伴う遺構確認調査
ひしやせき 東弓削遺跡	やおし市 やおぎ 八尾市 八尾木	27212		34° 36' 24"	135° 37' 02"	990121・26～28	32	水路改修に伴う遺構確認調査

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
久宝寺遺跡	集落	近世・弥生時代	溝・落ち込み	弥生土器、土師器、瓦 陶磁器	
心合寺山古墳	古墳、寺 跡	古墳時代・白鳳 ～鎌倉時代	堤体(平安末以降)	瓦、土師器	
心合寺山古墳	古墳	古墳時代	墳丘構成層とみられる層		
跡部遺跡	集落	弥生時代・古墳 時代	落ち込みもしくは溝、包含層	弥生土器、土師器	
中田遺跡	集落	鎌倉時代・古墳 時代	火葬関係遺構、溝状遺構	瓦器、土師器、須恵器、庄内 式土器	
中田遺跡	集落	弥生時代・古墳 時代	溝	庄内式土器	
東弓削遺跡	集落	平安時代・鎌倉 時代	溝等	瓦器、須恵器、土師器、製塩 土器、砥石	

八尾市文化財調査報告43
平成11年度公共事業

八尾市内遺跡平成11年度発掘調査報告書Ⅱ

発行日 2000年3月

編集・発行 八尾市教育委員会

〒581-0003 八尾市本町1-1-1

TEL (0729)24-8555

<八尾市刊行物番号H11-76>

